
心/PRESENT

りおぼん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心/PRESENT

【Nコード】

N2634D

【作者名】

りおぼん

【あらすじ】

優しく明るくそして可愛い、クラスで最も人気のある女の子、白石彩音。その性格とは正反対で、淡々として、無口でクールな男子、川村涼。中学に入学してから半年が経ち、あまり話したこともない二人だったが——中学校生活を舞台に描いた、恋愛物語です。

PROLOGUE：始まり

少女は授業に遅れそうになり、急いで廊下を走っていた。

「やばっ！　また先生に怒られるよー」

困った様子でそう呟く。

彼女の名は白石彩音^{しろいし あやね}。いつも元気で明るい女の子だ。

彩音は慌てていたため、曲がり角を曲がるとき、何者かに激突してしまった。

「きゃあー！」

彩音は後ろに転んだ。「いたたー」と言いながら鼻をおさえる。

ぶつかった相手の少年は、彩音が落とした筆箱を拾い上げ、ゆっくりと差し出した。

「これ」

無愛想にポツリと呟く。彩音は咄嗟にそれを受け取った。

「あ、ありがとう」

そういつて、少年の顔を見上げた。

彼の名は川村 涼^{りょう}。いつも無口で、彩音と同じクラスの男の子だった。

涼はすぐに右を向き、何事もなかったかのように去っていった。

（あれ・・・どこいくのかな・・・？）

そう思いながら立ち上がり、スカートの汚れを払い落とした。

そのとき、どこからともなく休憩時間終わりのチャイムが鳴り響いた。

「え、ちよっ！ 待ってよ！！」

少女は慌てて駆け出した。

CHAPTER 1：彩音と涼

彩音は教室の扉を開けて、大声で叫んだ。

「遅れてすみません！」

クラスの視線が彩音に向けられる。

彩音は肩をすぼめて先生の反応を待った。

「コラ！ 何故お前はいつもそう遅れる・・・まったく、さっさと席に着きなさい」

先生は、いつものようにきつくは怒鳴らなかった。

すぐに黒板に向き直り、また何かを書き始めた。

彩音は早足で自分の机に向かった。途中で友達の裕子と目が合う。

裕子は苦笑しながら彩音を見つめていた。

（あー、また恥ずかしいことしちゃったな・・・）

彩音は心の中で呟いた。

彩音は外側の、窓から外が眺められる位置にある自分の席に着いた。それと同時に、教室の扉がゆっくりと開けられた。涼だ。

再び生徒の目が一点に向けられる。

彩音も少し興味あり気に涼を見つめた。

先生の手が止まった。

「コラ！ もう休憩時間はとっくに過ぎているぞ！」

そしてしかめっ面をする。

涼は、真っ直ぐ先生に向き合って淡々と言った。

「すみませんでした」

慌てた様子も、焦った様子もない。

ただ自身のペースで、さらに無表情で発した言葉だった。

逆に先生のペースが乱されたみたいだった。

「・・・・」

黙って何も言わない先生の真横を通り抜け、涼は自分の席へと向かった。

涼はいつもこんな感じだった。いつも無表情で何を考えているかわからない。

口調も淡々としていて、どんなときでも冷静沈着。

顔は格好良いため、最初は「クールでいい」って言われ、女子からも人気があったが、

極端に無口なために今はその数も少なくなっている。

そんな彼には誰一人として友達がいない。

というよりも、彼自身が友達という関係を拒んでいるように思えた。

彩音は、そんな涼と全く正反対であった。

彩音は優しく、明るく、そして可愛く、クラスで最も人気がある女の子だ。

少しおつちよこちよいなところがあり、先生にはよく叱られている。また、よく女子がつくる「グループ」といった固定的なものにはあまり興味はなく、

どちらかといえば「みんなでしょう」っていう考えが強い。

そんな彩音と涼は、中学校に入学して半年も経つが、お互いにもあまり知らない状態であった。

彩音は、バッグから教科書を取り出す涼を見つめた。

（そつえば、川村君とはまだあまり話したことがなかったなあ）

授業が終わり、先生が教室を立ち去ったとき、彩音は涼に話しかけてみようと思った。

「あの、川村君」

彩音は涼の机の前にしゃがみ、顔を見てから呼びかけた。

「さっきは、筆箱拾ってくれてありがとね」

そのとき、初めて彩音の存在に気付いたというふうに、顔を彩音に向けてポツリとこう呟いた。

「君・・・誰？」

「え・・・」

（ええええ！！？　ちょ、ちょっと！　半年も一緒なのに知らないの！？）

彩音は自分の名前を覚えてもらえてなかったことに、少なからずショックを受けた。

彩音は、困ったように微笑みながら、とりあえず自己紹介をすることにした。

「あたしは白石　彩音。川村君と、同じクラスだよ」

まるで初対面の人に話しかけているような感覚だった。

「ふーん、そう」

相変わらず無愛想な口調で返事をする。全然興味なさ気の様子だった。

彩音は次の言葉に迷った。そのとき、初めて涼から話しかけてきた。

「君は、壁でいっぱいだね。凄く明るいけど、実は凄く暗い」

「？」

彩音は首を傾げた。何を言っているのかさっぱり理解できなかったからだ。

そのとき、背後から裕子が声をかけてきた。

「彩音！ ちょっとノート配るの手伝ってくれないかな？」

「あ、うん。わかった」

彩音は振り向き、裕子から十冊ほどのノートを受け取った。
そしてチラッと涼に目を向けた後、そのノートを配り始めた。

ちょうど全部のノートを配り終えたころ、
休憩時間終了のチャイムが校内に鳴り響いた。

黒板の端に書いている時間割を見ると、どうやら次は英語の時間だった。

そして教室の扉が開き、英語担当の女教師、内藤先生と、ALT（外国人教師）のエイレナが入ってきた。二人は軽く英語で会話した後、内藤先生が教卓の前に立って言った。

「good morning everyone!」

内藤先生は、早く生徒たちに英語に慣れてもらうため、毎回挨拶は英語で話している。

ちなみに今は3時間目だが、これが5時間目になれば
「good afternoon everyone!」となる。

「good morning Ms. Naito!」
生徒たちは英語で返事をした。

続けて内藤先生は問い掛ける。

「How きぶんは are いかが you? ですか」

「Fine はい thank あなたは you どう and です you? か」
と、生徒。

「I わたしも m f i n e t o o だい thank ありがとう you う」

これが挨拶の一連の流れである。

これをA L T のエイレナも同じことを言い、いよいよ授業というわけである。

彩音は英語が苦手であった。特に三単現（三人称 単数 現在形）の分野に入ってから授業自体殆どついていけない状態である。

今は十月なので、現在進行形の内容に入っているが、これもまたよくわからないのである。

「ええ、まずは現在進行形の復習に入りましょう」

そう言って、内藤先生は黒板に問題を書き始めた。

これは毎回のパターンだ。次は生徒にその問題を解かせる。手を挙げた人を当ててその人に解かすという方法ならまだ良いのだが、

彼女は苦手な人にも行き渡るようにランダムで当てるのだ。

彩音は内藤先生から目を逸らし、当てられないように努力した。

（あゝお願い！ 絶対当てないで！）

そして見事、内藤先生の目は彩音で留まった。

「では白石さん。この問題のカッコに当てはまる答えを言うてください」

やっぱり当てられてしまった。人とはなんとも上手くできていて、当てられたくないときだけ妙に当てられやすい傾向にあるようだ、と彩音は思った。

彩音は諦めて立ち上がった。

見ると、問題は非常に簡単であった。ただ、
「彼は英語を勉強しているところですよ」という文章を英語に直すだけであった。
しかし、
「勉強」という単語がどうしても浮かび上がらない。

「He is . . .」

（なんだっけ！？ えーと、えーと）

彩音は視線を宙に泳がせた。しかし、内藤先生は待つてはくれなかった。

先生はため息をつき、座りなさいと呟いた。

「これくらいはスラスラと出来るよう家でちゃんと勉強しなさい」

「はい・・・」

彩音は席についた。

その後、よく理解できない授業が長々と続いた。

そして授業も終盤を向かえ、そろそろ終わりのチャイムが鳴るころだろうと思われたときだった。

「では今から色々な動詞を出します。英語の勉強には必要不可欠なものです。

もちろん、ただズラズラと私が言うことはしません。

全部答えてもらいます。では・・・
「教える・書く・壊す」の英単語は？川村君」

この単語はまだ、学校の授業でも習っていないものだった。

（そんなのわかるわけないよ・・・）

彩音が心の中でボソボソつと呟いているとき、涼はそれを、いかに易々と答えた。

「t e a c h、w r i t e、b r e a k」

即答だった。先生はおおくと微笑んで、「素晴らしい」と言った。

（へえ、川村君で意外と英語できるんだ？）

彩音はそれを知って、今度英語を教えてもらおうと思った。

そして、それとほぼ同時に、終わりのチャイムが鳴った。

CHAPTER 1：彩音と涼（後書き）

一話目投稿♪

英語とかミスしてたらすごい恥ずかしいですよ（笑

多分、あってます。多分。

CHAPTER 2：虚ろな瞳

4時間目も終え、昼食の時間になった。

彩音は弁当を取り出し、今日は誰と一緒に食べようかと思った。

クラスの生徒たちは分散し、仲の良い子と昼食を楽しんだ。

その中で、一人で食べている涼と、細くて大きい眼鏡の笠原知恵かさほろが目に入った。

知恵は物知りで頭も良いが、少しヒステリックな女子ということで友達といえる人はそう多くない。

しかも、彼女のヒステリーをケラケラとあざ笑う者も現れ始め、それ以来彼女は人間不信となってしまうたのである。

しかし、この日は彼女に聞きたいことがあった。

彩音の目は彼女で留まり、少しの間じっと考えた。

そのとき、彩音は背中をバンと押されびっくりした。

「彩音っちー！ 弁当一緒に食べようっ！」

この陽気な声は、早苗さなえだ。

彩音は振り向いた。

「ごめん。今日はちょっと無理かも」

申し訳なさそうに言う。早苗はニコっと笑って「わかった」と呟いた。

そして彩音はピンクの弁当箱を持って知恵の机に近づいた。

「ねえ、知恵。今日一緒に食べない？」

彩音は既に弁当のごはんを食べ始めている知恵の、顔が見える位置にしゃがんで言った。

知恵は少しびっくりして不思議そうに彩音の目を見つめた後、ぶつぶつとこう言った。

「本当は一緒に食べたいわけじゃないんでしょう？ 私に何か用？」

とても尖った口調だった。彩音は一瞬戸惑った後、正直に本当のことを言った。

「ええ、実は、ちょっと気になった子がいて……。その人について知ってることを教えてほしいんだ」

「ふうん、やっぱりね。でも、プライバシーに関わることは教えられないよ」

知恵は得意げに言った。彩音はこくと頷く。

「それで、誰のことを知りたいの？」

「川村君のこと」

彩音は周囲を警戒しながらささやくように言った。しかし、知恵は少し困ったような顔をする。

しばらく考えこんだ後、彼女は箸を置いて呟いた。

「彼のことは私もあまり知らない。家庭環境も、性格もね。強いていえば謎の子かしら」

その言葉を聞いて、彩音は残念そうに俯いた。しかし、すぐに顔を上げる。

「少しでも知っていることがあつたら教えて！」

知恵は箸を握るようにして持った。

「そうね・・・」

そして弁当のおかずをかき混ぜる。肘をついて、その手を頬に当てた。

「とても目が怖いときがある。まるで、魂が抜けてしまったかのような・・・」

顔を上げて、付け加えるように言った。

「たまにだけどね」

そしてまた顔を弁当に戻し、タマゴ焼きをグサッと刺してから口にはこぶ。

（魂が抜けてしまったような目か・・・）

彩音は自分の弁当を見つめた。

それを見た知恵は、気に入らなかったのか、そっぱを向いて言った。

「結局、それが聞きたかっただけなんですよ。食べたいなんてウソついて。」

もう用が済んだんだったら、他の子と食べてきなさいよ」

そう言いながらも彼女は、寂しさを我慢しているようだった。

彩音は彼女の机の上に弁当箱を乗せて、その包みを開け始めた。

「うっん、せつかなんだし、一緒に食べよう」

そして、ふたを開けて箸を持った。

彩音は、知恵の目をまじまじと見つめて、確認するように付け加えた。

「ね！」

そして二人は色々話をしながら、昼食をともにした。

話しながらわかったことなのだが、彼女はとても我慢していたそう
だ。

無口になれば自分のヒステリーで笑う者もない。

そう考えた彼女は、猫を被ったように話すことをやめたのだという。

だから、少なくとも彩音と過ごしたその一瞬の時間は、

彼女にとって和らぎの与えられた時間だったろう。

昼食を終えた彩音は、弁当をかばんの中に片付け、図書室に向かう

ことにした。

図書室は、今いる新館とは逆の、旧館の三階端にある。新館は旧館と向かい合って建っており、その間には中庭があるのだ。だから彼女はいったん中庭に出て、旧館の非常階段から三階に上ることにした。

右手には以前から借りていた「赤髪の少年の学園物語」という小さな本を持ち、左手にはえんぴつを一本持っていた。

非常階段を抜けた先の廊下の奥、そこに図書室がある。彼女はゆっくりと図書室へ向かった。

図書室の扉を開けた。カウンターでは、厚生委員の人たちが本の処理や貸し出しを行っていた。

すぐそばにある縦長の机には読書を楽しむ男女が座っており、また、窓際で立ち読みをする人もいた。

彩音はまず、借りた本を返すことにした。

カウンターで待ち受ける太田真由美先輩の前に立ち、本を差し出した。

「先輩、この本すごく面白かったです。すぐに読み終わっちゃいました！」

嬉しそうに言う彩音に、真由美は本を回収しながら微笑んだ。

「そう、それはよかった。もし、もっとそういう系統の本を読みたいっていうなら、

そっちの「感動」っていうところの本を探せば面白いのはたくさん

ん出てくると思うわ」

殆ど片手間で話す真由美に本を渡した後、彩音は言った。

「ありがとうございます、先輩。ちょっと見てきますね」

軽く会釈をした彩音は、^ハ感動^クという看板が掲げられた本棚の通路に入っていった。

彩音は自分の気に入るような題名の本を探しながら通路を歩いていると、

前方で本を片手に真剣そうに読む男の子の姿に気がついた。

「あれ、川村君」

彩音は声をかけた。しかし、涼は返事をしない。

「川村君もこういうの好きなんだ」

彩音は涼に近づいて言った。そのとき、初めて涼は彩音のほうを向いた。

「君、さっきもいたね。確か、白石さんだっけ？」

（名前、覚えててくれたんだ）

こんな時期に覚えられるのは普通恥ずかしいことなのだが、何故か嬉しく感じられた。

「で、俺に何か用？」

本当に淡々と、無愛想な物言いであった。

「え、あ、いや、たまたま見掛けたから、声かけてみただけ」

彩音は答えた。

涼はまた視線を本に戻すと、何事もなかったかのように読み始めた。

彩音もそれ以上はなすことはないと思い、涼の隣で何か良い本はないかと探し始める。

そんなとき、ふと彼女の目を見つめた涼が、いぶかしげに呟いた。

「君、やっぱり壁があるよ」

「え？」

彩音は何かと思い、涼のほうを見た。

涼は、さきほど話しかけたときの目をしていなかった。

彼の目は、だんだんと色を失ってきて、

黒かった瞳が、まるで意識が遠のいていくかのような灰色の瞳になる。

やがて彼の目は、虚ろとした、放心状態になってしまったかのような目になった。

『魂の抜けたような・・・』

彩音は咄嗟に知恵の言葉を思い出した。

そしてだんだん怖くなってきて、後ずさりした。

「うっ！」

そのとき、涼は頭をおさえて苦しんだ。

すぐにその場にしゃがみこむ。

彩音は少しびっくりしたが、すぐに彼のそばにつき、彼の名前を呼んだ。

「川村君！　ねえ！」

彩音は半ば混乱状態で、涼を支えるように叫んだ。

しかし、涼は大丈夫だと言いたげに立ち上がり、彩音にこう言い返した。

「なんでもない。忘れろ」

そして、急ぐように本を棚に戻し、早々とその場を立ち去っていった。

CHAPTER 2：虚ろな瞳（後書き）

なんとか名前を覚えてもらった程度、って感じですね
あと、彩音の純粹な優しさにちょっぴり感動・・・（笑

CHAPTER 3：連絡便り（前編）

翌日、彩音はいつもより十分早く学校に行き、教室の扉を開けた。

教室には、まだ十人ほどの生徒しかいなくて、いつになく静かな雰囲気だった。人気ひとけが少ないため、透き通った涼しい空気が流れ込んでおり、息を吸うととても気持ちいい感じがした。

少ない生徒たちの中の、サッカー少年と人気の、山本隆一が叫ぶように言った。

「白石じゃん！ おはよう！！」

「おはよう」

彩音は微笑んで返事をした。山本は身を乗り出して聞く。

「今日はなんでこんな早いの！？」

彩音は答えた。

「目覚めがよかったからかな」

そして彼の横を通り過ぎ、彩音はかばんを机に掛けた。

（さて、朝学習しないと。今日は英語だから、急がないとね！）

朝学習とは朝の約十五分間、配膳台に置かれている「朝学習プリン

ト、というものを取って、

問題を解いていくという勉強の時間のことである。

もちろん、全て終わらせ丸付けをしたあと、教卓の上に提出しなければならぬ。

そして終わっていないかったもの、また、不十分な終わり方をしているものは

居残り&やり直しという罰が待っているのである。

今日、彩音が学校に早く来たのもそのためだ。本日の朝学習は英語プリントである。

英語が苦手な彩音にとって、十五分でそれを終わらせるのは厳しいものがあつた。

（えっと・・・「彼」はHeだから動詞は・・・あれ、どっちだっけ？）

彼女は一問目から手が止まつた。三単現なんて何がなんだかさっぱりわからない。

英語プリントを凝視する彩音を見て、山本は優しく言った。

「それは三単現の否定文だからdoes・ntだよ。ちなみに動詞は原型のまま」

あ、そつかと呟いた彩音は、間違いを消して正しい答えを書き直した。

「山本君は頭良いんだね」

彩音は顔を上げて言った。山本は少し赤くなり、ひょいっと目をそらす。

(うわぁマジ可愛い！ あんな目で見られたら直視できないって！)

「あ、いや。ってか、それ基本問題だからさ。・・・白石は英語苦手なのか？」

その質問に、少し苦笑いを浮かべた。

「あはは・・・バレちゃったか。あたし英語ほんとダメで・・・」

(おお！！ これは彩音ちゃんと親睦を深めるチャンスだよな！？
よし、ここは・・・)

「じゃさ、俺でよかつたらいつでも聞いてくれよ。英語は得意だからさ！」

山本は頭をかきながら言った。さりげに自信気な表情を見せながら。

「え、ほんと！？ でも、あたしわからないことだらけだから、いっぱい聞いちゃうかも？」

「ああ、質問ならいくらでも受け付けるぜ！」

(やったー！！！！！！ ついに俺にも青春きたー！！ てか、あの顔やばいって！)

心の中で大絶叫の山本は、上機嫌で自分の席に戻った。
その様子は、近くから見てもよくわかるくらいだった。

彩音は続いて二問目に取り掛かった。

（あゝこれもわからないよ。えっと、Whatの形だから・・・）
相変わらず苦戦中であつた。

朝学習時間が終わるまでには、なんとか丸付けまで終わらせることができ、
無事に提出することができた。そして安心のため息をついた後、心の中でこう呟いた。

（はぁ、朝から疲れた）

担任の松倉先生は入ってくるなり山本の異変に気付いてこう呟いた。

「おい、山本！ やけに機嫌良さそうじゃないか！ なんか嬉しいことでもあつたのか？」

「はい・・・すつごく！」

こういう一見何の変哲もないトークでも、生徒たちの前でやると何故か笑えるものである。

彩音は一時間目「数学」の教科書を取り出しながら、担任の話を聞いている。

「えーと、今日の欠席は、千倉^{ちくぐら}さんと、川村君か。
二人とも連絡はまだだなあ・・・」

彩音はピクつと一瞬反応した。千倉はともかく、涼には思い当たる節があったからだ。

（川村君、今日休みなんだ……。昨日頭おさえてたし、やっぱりそれが原因なのかな）

担任は特に何も話すこともなく、トントンと書類を整理した後、早々と教室を去っていった。

まるで交代するかのように、ほぼ同時に数学の川岸先生が入ってきた。

「はい、ではまず、挨拶しましょーかー！」

彼女の特徴は会話中、異様に「はい」という言葉が多いこと。ある日生徒が回数を数えてみた結果、五十分間で七十回も「はい」と言っていたらしい。

何気ないことなので大して気にも留めていなかったが、実際それだけの回数を口にしてしていると聞くと、改めて凄いと思わせる。

生徒たちは、日直にしたがっていつもの挨拶を済ませたあと、遅くも数学の教科書を取り出し始めた。

「はい、では今日の授業は何かと言いますとー、今日は新しい範囲の「一次関数」というところをやっていきたいと思いまーす」

先生は「一次関数」という部分を特に強調して言った。

（一次関数か……。なんか難しそうなタイトルだなあ……。）

「では教科書の百二ページを開いてくださーい！」

その後先生は、はいを連発しながら授業を進めていった。

ちょうど「a」が傾きで「b」が切片という説明を終えたくらいに、授業終了のチャイムが鳴り響いた。

「えー、みなさん、今月は中学に入って初めての文化祭がありますね！」

そして残念なことに、その一週間後に中間テストがありまーす。行事やテストなどで忙しいこととは思いますが、頑張つて乗り切ってくださいーい。

はい、では終わります」

（そういえば、今月は文化祭があるんだっただ……。）

彩音はそう考えながら終わりの礼をした。

この桜平岡中学校は、文化祭は一年生から三年生まで劇をする。

それも各学年の生徒が考えた、オリジナルストーリーである。

文化祭は十月の下旬にあり、今はまだ上旬で、劇の役さえもまだ決まっていない状態だった。

既に劇の台本はできあがっているため、おそらく金曜日の「総合」の授業で役決め、の授業があるだろうと思われる。

また、劇が終われば各クラブによる催しがあり、

劇が終わった後から夕方まで遊び尽くすということである。

毎日勉強やら何やらで刺激がないぶん、彩音にとってはとても楽しみな行事なのだ。

CHAPTER 3：連絡便り（前編）（後書き）

Q & A 山本って、ほんとに英語得意なの？

回答：五教科の中では最も得意とのことですよ。

CHAPTER 4：連絡便り（後編）

その日の昼も、知恵と共に食事をすることにした。

知恵は、昨日と比べてだいぶ雰囲気明るくなったような感じがしたし、

「どうせ食べたくないんでしょ」などと拒絶するような発言はしなかった。

また、知恵は勉強だけでなくあらゆることに對して物知りであるため、

どんな話題を持ち込んでも乗ってきてくれるのでとても話が弾んだ。

昼食も終え、弁当箱を包みに直している二人の前に早苗が現れた。

「ねえ・・・」

二人は早苗を見た。寂しそうに早苗は言う。

「明日から、その・・・ウチも入れてくれないかな？」

早苗はきつと、彩音をいわゆるグループの仲だと思っていたのだから。

そういえば、昼食をとるときはいつも早苗と一緒にいた気がする。それに気付いた彩音は、少し申し訳なさそうに答えた。

「そうね、一緒に食べよ！　ね、いいよね？」

彩音は知恵に確認をとった。知恵は少し迷った顔を見せたが、すぐ

にこくと頷いてくれた。

「ありがとっ！」

早苗はニコッと笑って言う。明日はきっと賑やかな食事になりそう
だ。

昼休みは殆どボーっとして、廊下の窓からグラウンドでサッカーを
する男子たちを見つめていた。そんな彩音に、ゆっくりと背後から
近づく者がいた。

彩音は脇をキュッと掴まれて変な声を上げた。

「彩音、何物思いにふけているのよ？」

こういうことをするのはたいてい裕子だ。彩音は咄嗟に振り向き、
相手の顔を見た。

そしてやっぱりかため息をつき、苦笑いを浮かべて言った。

「ちょ、急に脅かさないでよ」

「はっはっは！ 油断しすぎだ！」

裕子は揚々と笑ってから、彩音の隣に入って、一緒に外を眺めた。

「なんだ彩音！ あの中に好きな男子でもいるのか！？」

裕子の話し方はまるで男っぽい。わざとらしいといえばわざとらしいが。

「そんなわけないじゃん。今は好きな子いないよ」

彩音は答える。

「ふーん、まあ彩音は純粹だからね。そういう感情は持ち合わせていないか！」

「ちょ、それどういう意味!？」

裕子はぷつと吹いて笑った。彩音も続いて微笑する。

そのとき何かを思い出した彩音は、少し真面目そうな顔をして聞いた。

「あ、裕子、そういえばさ、今日なんで川村君休んだか知ってる？」

「・・・なんだお前、川村狙いか!？」

「ち、違うよ。ただ、珍しいなあっと思ってさ」

裕子、これは真面目な話だつてば!

そんなことを言いたげな顔をする彩音に、わざとらしく笑った。

「ごめんごめん。てか、あたしがそんなこと知ってるわけないじゃん?」

そういうことは先生に聞いたほうが早いんじゃない?」

(あ、そうか。なるほど)

「そうだね。わかった、ありがと！」

彩音は言った。すると、裕子はニヤリッと笑ってまた彩音の脇に手を回した。

そして彩音はびっくりして声をあげる。

嬉々した裕子は、彩音の耳元で声色を暗くしてささやいた。

「ホラホラ、本当は好きな子いるよねー！ 早く言わないとー・・・」

裕子の手がまるでクモのように動いた。彩音はピクピクと震える。

「ちょ、ちよつと、裕子・・・」

その瞬間、裕子の手がバツと離れた。彩音は顔を真っ赤にしてその場に座り込んだ。

「あつはつは！ 冗談だ！ 許せ」

（「冗談って・・・ちよつとやりすぎだよー！！」）

そう思いながら振り向いたときには、もうすでに裕子は教室に戻っていた。

彩音はあまりに行動の早い裕子に、深いため息をついたのであった。

その後、5時間目、6時間目と過ぎていき、やがて掃除の時間になった。

そのとき、さきほど裕子にいじられて忘れかけていた言葉を思い出

した。

『先生に聞いたほうが早いんじゃない？』

うん、そうだね！

彩音は廊下を掃いている途中、監視のためにたまたま現れた担任の松倉先生に声をかけた。

「あ、先生」

「ん？ どうした？」

先生は唇を噛みながら彩音に向き直った。

「今日、何故川村君が欠席したのか、理由知ってます？」

「ああ、川村のことか。連絡では、ただの風邪だということだ」

普通の返答に、彩音はなーんだと呟いた。

そしてすぐに立ち去ろうとすると、先生は待てと言って呼び止めた。

「白石、君、川村君の家知っているか？できればこのお便りを届けてもらいたいのだが」

先生はファイルから藁半紙を取り出した。

もちろん彩音は、涼の家を知らなかったが、あえて引き受けることにした。

「あ、はい。大丈夫です」

彩音は先生から連絡便りを受け取った。

そこには明日の時間割と今日の授業内容が綴られている。

彩音はそれを綺麗に四つ折りにしてから制服のポケットに入れた。

「じゃ、頼んだぞ」

掃除も終わり、終学活（終わりの学級活動）の時間に入った。

日直が前に来て、本日の出来事や授業態度などについて話をする。

それが終わると先生の話が始まって、いつになく短時間で終了した。

生徒一同は起立、そしてさようならと言った瞬間かばんを持って各自のクラブへと去っていった。

ちなみに彩音はテニス部に属しているが、たまにしか顔を出していない。

美術部として活動している知恵は、スケッチブックを持って美術室へ向かおうとしていた。

「ねえ知恵！」

彩音は咄嗟に呼び止めた。教室の扉を出る辺りで、知恵は立ち止まる。

「教えてほしいことがあるんだけど！」

彩音は知恵に近づいていった。知恵も彩音に向き直る。

「なに？」

「えっと、川村君の家の場所を教えてほしいの。連絡便りを届けなくちゃいけないから」

「いいわ。ちょっと待って」

知恵はバックを下ろし、そこから小さな紙切れを取り出した。さきほど先生が配布した、体調管理についてのプリントである。

それを近くの机に置くと、裏を向けて地図を描き始めた。

「彼の家はこの通りに沿って右に曲がり、左手の三番目に見える家ね」

知恵は彼の家にあたる部分に丸をつけ、その紙切れを彩音に手渡した。

「ありがとね！」

彩音は微笑んで言った。

CHAPTER 4：連絡便り（後編）（後書き）

いよいよ涼の家へ向かいます！

次話お楽しみに！^^

CHAPTER 5：約束

彩音は地図通りに道を進み、とうとう涼の家の前まで来ていた。

涼の家は、いかにも2007年と感じさせるような白くて綺麗な家だった。

二階建てで、屋根は赤色。外には小さな庭があり、周りは塀に囲まれている。

そして石彫りの表札には、確かに『川村』と書かれていた。

彩音は表札の下のチャイムを押した。

「ピンポン ピンポン」

チャイムの前に立ちながら、じっと返答を待っていた。すると、パチっという音と共にそこから女性の声が聞こえてきた。

「……はい？」

とても可愛い声だ。

「あ、桜平岡中学校の者です」

彩音はチャイムに顔を近づけて言った。

「あ、はい」

そこで一度、通信が切れたような音がした。しばらく待っていると、家の玄関扉が開き、中から涼の母親と思わ

れる人が出てきた。

その女性は、まだ二十歳くらいではないかと思われるほど若く綺麗な人で、

スタイルもよく、身長も彩音より少し高いくらいだった。

女性は青い門を開け、彩音に向き直った。

「わざわざ涼のために、ありがとうございます」

チャイムで聞いたときより、さらに可愛い声であった。

「あ、いえ。・・・あの、これ連絡便りです。涼くんに、渡しておいてください」

彩音はそう言いながら連絡便りを取り出し、女性の手元に差し出した。

しかし、その女性は連絡便りを見つめただけで、それを受け取ることはしなかった。

そして優しい目を彩音に移し、少し寂しげな表情でこう言った。

「それは、直接あなたの手から涼に渡してくれないかしら。

そのほうがあの子も喜ぶと思うの・・・」

彩音は一瞬紙切れに目をやった。どうしようかと迷い、下を向く。そして、小さく頷いた後、顔を上げて返答した。

「・・・はい。わかりました」

彩音は門をくぐり、家の中へと迎え入れられていった。
玄関で靴を脱ぎ、床に上がったところで女性は言う。

「その階段を上って右側の扉が、涼の部屋よ」

女性は階段を指差した。彩音は縦に一回頷く。

そして、女性に軽く会釈をしたあと、その階段をゆっくりと上っていった。

トントンと階段はよく響いた。階段のカーブを曲がって、二階に上がった。

（えっと、右側の部屋・・・）

二階に上がってすぐ右側には、『涼』と彫つてある板が掛けられた扉があった。

彩音はその扉を軽くノックし、取っ手をグッと倒した。

部屋は六畳くらいの広さで、床にはカーペット、奥には勉強机にベツド、

すぐ前にはテレビが置かれていた。

全体的に整理された部屋で、ガチャガチャと物が転がっているわけでもなく、綺麗だった。

彩音は、壁にもたれて座る涼に、小さな声で挨拶をした。

「こんにちわ。川村君」

涼は少し驚いた様子だった。彩音を見上げて呟く。

「君は・・・」

まさかクラスメイトがやってくるとは思わなかったのだろう。
涼は口をぽっかりあけて彼女を見つめていた。

彩音はそんな涼に、手に持っていたお便りを彼に差し出した。

涼はスツと手を差し伸べてそれを受け取る。

そしてお便りと彩音を交互に見たあと、いつもの無愛想さを取り戻した。

「風邪って聞いたんだけど、大丈夫？」

彩音は心配そうに聞く。涼は目をそらして答えた。

「ああ、もう治ったよ」

「そっか、それはよかった！」

彩音はニコッと微笑んでそう言い、涼の前に腰をおろした。

涼は、全く興味ないと言わんばかりにお便りを未開封のまま机の上に置いた。

そして彩音に向き直り、なんだか不思議そうな目で彼女を見つめた。

「白石は、学校楽しい？」

突然で、しかも意外な質問だった。彩音は一瞬「え」と声を漏らす。
しかし、驚いた以上に、白石と呼んでくれたことが嬉しかった。

「うん、楽しいよ。面白い人とかいっぱいいるし」

彩音は笑顔で答えた。今の学校生活に不満はない。そんな表情だった。

「そうか……。俺は正直、楽しくない」

「え……」

「授業もつまらないし、友達もないしな」

そのときの彼は、とても哀しげな表情をしていた。苦しいとか、寂しいとかではなく、ただ哀しげな。

そんな様子を見てみると、こっちまで哀しくなってしまうようだった。

彼が言うと、それが特に強く感じられる。

彩音は少し胸が重くなり、暗い表情をする涼を呼びかけるように言った。

「あたしはやっぱ、川村君に友達って思われていないのかな……」

涼は顔を上げた。そのとき、二人の目がピタッと合ったような気がする。

しかしすぐに涼は視線を落として、彩音の言葉に対する答えを返した。

「さあな・・・」

低く、今にも消えてしまいそうな声だった。

彩音はショックを受けた。でも、まだ関係もそれほど深くないし、仕方ないとも思った。

彩音にとって、クラスの中で、学級がつまらないと感じている生徒がいるというのは何よりも寂しいことのように感じられた。そして、きっといつか皆が楽しいといえるようにしようと思っただってそうしないと、本当のクラスとは言えないでしょ。

「川村君、明日は学校来るよね？」

彩音は立ち上がった。涼は彼女を見つめる。

「ああ、多分な」

相変わらずの無愛想な返事だった。

彩音は優しさに溢れた微笑みを浮かべて言った。

「絶対来て！ 約束。・・・待ってるから」

涼は自分の顔が赤くなるのを感じた。

そして咄嗟に目をそらす。しかし、既に彩音は振り向いていた。

彩音は扉を出て、帰っていつてしまった。

（約束、か・・・）

一人残された涼の中で、何かが少しずつ変わり始めていた・・・。

CHAPTER 5 : 約束（後書き）

CHAPTER 6：二つの不幸と一つの幸福

（あー、また遅刻しちゃうよー）

彩音は走って学校に向かっていた。ふと公園の時計を見ると、針は8時15分の少し前を刺していた。もし8時15分以内に学校に入らなければ、日直日誌にチェックを入れられて先生に叱られてしまう。

生徒たちの前で立たされて怒鳴られるのは恥ずかしいことである。しかもその様子を面白がる生徒もいるため、余計にだ。

彩音は公園を右に、そのまま直進し、少し先に見える学校に目をやった。

門を閉めようと手を触れる教頭先生の姿が見える。

そしてすぐそこまで来たとき、教頭先生も彩音の姿に気付いたようだった。

「急ぎなさい！ まったく・・・」

彩音は学校に入る直前で立ち止まり、息を整える。もう閉門ギリギリであった。

「すみません・・・」

ポツリと呟く。教頭は不機嫌そうにフンと鼻を鳴らして「早くいきなさい」と言った。

彩音は急いで教室に向かった。階段を駆け上がり、渡り廊下を右に曲がる。

そしてすぐ右手に見えるのが、教室だ。

彩音は教室の扉を開けた。もう既に生徒は席に着き、朝学習プリントを始めていた。

生徒たちの視線が扉に立つ彩音に向けられ、彩音は少し恥ずかしい気持ちになった。

そしてゆっくりと歩きながら、配膳台にある朝学習プリントを取ろうとした。

だが、手を差し伸べる寸前で彼女の動きが止まった。

「あれ、英語・・・？」

小声で独り言。何か嫌な予感がして、前の黒板に目を移す。

「今日の朝学習は数学となっていました、急遽変更で英語になりました」

（えー！！ そんなのってないよ・・・。あー、もう居残り決定だ・・・）

彩音は心の中で叫び、そしてガクッと落ち込んでため息をついた。

（遅刻に居残りって、今日は災難続きだなあ・・・）

意気消沈中の彩音は、英語の朝学習プリントを持って席に向かった。

その途中、裕子の呆れた顔が目に入る。

裕子はそのまま通り過ぎようとする彩音の服を掴んで思い切り引張った。

急に強い力に引かれたせいか、彩音はびっくりして転びそうになった。

「わわっ！ ちょっと何！？」

彩音は裕子のすぐ顔の近くに寄せられた。

裕子はニヤニヤ笑いながら、彩音の耳元でささやく。

「今日お前の楽しみにしてたことあんだろ？　なのに遅刻したくらいで何しよげてんだよ？」

（楽しみにしてたこと？　え、なんだっけ？）

彩音は不可解な顔をする。

裕子はガクリと首を落とし、ため息をついてから呟いた。

「あのなあ！」

裕子はなんで忘れてんだよと言いたげに目を閉じ、はき捨てるように教えてあげた。

「文化祭の劇の役決めだろ！？　ほら、〔総合〕の時間楽しみだーとか言ってたじゃないか」

彩音はまだ不可解な顔をする。そして少し頭の中を探った後、あつと呟いて思い出した。

「あ、あー！！ 思い出したよ。そうだったね。裕子、ありがとう！」
少しでもやる気の出ることがあれば気分が戻る。

裕子は彩音にピンとウインクした後、引っ張っていた服を放した。

彩音が机に着いたことを確認した裕子は、
隣の席の男子に「朝学習プリントの答えをよこせ」と言った。

彩音はもう手遅れだとわかっていたが、とりあえずプリントを始め
ることにした。
筆箱を取り出し、お気に入りのシャープペンを手にしてプリントに向
かう。

一問目、「貴方は犬を何匹飼っていますか、を英語に直しなさい」

（・・・ちょ、一問目からハードすぎじゃない！？）

まず「飼う」の単語とか習った？というところから疑問だ。

彩音はしばらくプリントとにらみ合っていたが、
すぐに頭の中がごちゃごちゃしてきてばつと顔を上げた。

（わからないに決まってるよ！）

そう思って前のほうを見つめた。カキカキという音が聞こえる。
気持ち良さそうに丸付けをする姿が見える。

（みんな凄いよ・・・こんなの普通できないよ）

普通ならできる。彩音自身が極端に苦手なだけだった。

彩音はクラスを目で一周させた。そのとき、彼女の目がある一点で留まった。

（あ、来てくれたんだ）

前のほうの席、黒板の正面の位置に涼の姿があった。彼はいつもどおり黙々と英語のプリントをしている。それを見た彩音は、少し安心したように微笑んだ。

約束とかじゃなく親に言われてただ仕方なく来たのかもしれない。そうも彩音は思ったが、だけど来てくれただけでもよかった。

やがて松倉先生が教室に入ってきた。

「ではそろそろ朝学プリントを提出してください」

もちろん、丸付けまで終わった人限定。

自分は丸付けどころか一問目さえも終わっていない状態だ。だから、もし提出すれば、逆に怒られるだろう。

ゾロゾロと提出に向かう生徒の中で、彩音だけが席についたままだった。

特に注目を浴びたわけでもなかったが、それはそれで恥ずかしい。

「二日連続英語は辛かったんじゃないですか？

もしもこれが二日連続国語ならみんな大喜びでしたのにね！」

松倉の担当教科は国語。だから調子に乗ったふうになどこんなことを言う。

生徒たちは「どっちも嫌だ」とか、「朝学自体ダルイ」などと叫んだ。

そんなとき松倉は、やれやれといった顔をし、また普通の顔に戻ってから

何事もなかったようにこう言うのだ。

「はいではきりーっ！」

なんだよと呟き、よろよろと不機嫌そうに立ち上がる生徒たちに、松倉は二つと白い歯を見せた後、叫ぶように言った。

「ではこのまま体育館に移動！」

この言葉に、生徒たちは一気に態度を変え、不思議そうな顔をした。

「はっ！？ どうしてですか、先生」

「一時間目国語ですよ？ みんなの大好きな！」

「また急遽変更！？ しかも、体育館ってさ、ウチ体操服もってきてないんですけどー」

生徒たちは口々に言う。松倉は「ハッハ」と変な笑いをして答えた。

「じゃお前らは文化祭でたくないんだな！ あーそうか。

せつかく一時間目に劇の役決めようってことで「総合」の時間もつてきてあげたのに。」

こりや中止だな、よかったよかった。安心して授業できるよ！」

生徒たちはまず驚いた。もともと劇の役決めは5、6時間目の予定だったからだ。

本当に1時間目からそれをやるなら嬉しいが、またこいつの悪ふざけじゃないのか、とも思い、生徒たちは互いに顔を見合わせた。

しかしすぐに期待の笑みを見せると、先生に視線を戻してまた口々に言い出した。

「マジですか！？ 先生！」

「さっそく行きましようよ！ 体育館でしょ！？ じゃ体育館シューズが要りますね！」

「って・・・先生なんで戻っているんですか！？」

「え、だってみんな国語がしたいんだろ？ ちゃんと抜き打ち用のテストは用意してあるぞ」

松倉のくだらないトークを無視して生徒たちは体育館シューズを手にした。

そして私語を発しながら早々と教室を出て行ってしまった。

「まったく愉快的やつらだなあ！ あっはっは」

彩音はポツンとその場に突っ立っていた。

何故かため息をつく。そのとき、背後から近づくあの気配に気がついた。

「バレたか！ チツ・・・彩音！ 元気取り戻したろ？ 早くいこよ！」

裕子だ。というか、もう背後から来る友達は全て裕子だと思ってもよい。

「ねえ、なんで1時間目になったのかな？」

彩音は振り向いて聞く。裕子は面倒くさそうに答えた。

「ああ、5、6時間目、体育館使えないんだとさ。
んで、1、2時間目は担任の担当の教科だから、特別にそこに
いたらしいよ」

早口言葉のようにサササと答えた裕子は、彩音の手首をつかんで続けて言った。

「もうみんな行ったよ！ はやくいこ！」

CHAPTER 6：二つの不幸と二つの幸福（後書き）

題名が謎です（汗）このまま劇の役決めまでいつちやったらかなり長引きそうなので、ここでいったん区切ることになりました！

CHAPTER 7：役者紹介

—— 体育館。

約百二十人ほどの生徒が座ったり立ったり、喋ったり騒いだりでこった返していた。

もう全員が興奮状態で、劇の内容や役者のことばかり話していた。

彩音は、その生徒の群れを拒むように離れ、壁にもたれて座る涼の姿が目に入った。

興味ない、つまらないといったような目をしている。

その様子を遠目で見つめていると、向こうもこちらに気付いたかのように顔を上げた。

そのとき、ざわつく生徒の声を一掃するような大声が、

舞台のほうから聞こえてきた。隣のクラスの担任、阿久津先生だ。

生徒たちは一斉に黙り込み、一斉にそちらを見遣る。

「まったく、お前らは一から十まで言わんとわからないのか!？」

吐き捨てるように言う。とても威厳がある顔つきは生徒を黙らせるには十分だった。

生徒たちは背の順に並び始めた。各自で前にならえをし、その場に気をつけをする。

それを見届けた阿久津先生は、舞台の上で腕組みをした。

裕子は彩音の耳元でささやいた。

「あんなのが担任だと、マジでやる気失せちゃうよね・・・」

賛同し難い愚痴だった。なぜなら、阿久津先生にも一理あるからだ。彩音は苦笑いを浮かべて相槌を打った。

阿久津先生の隣に、松倉先生がこのこと現れた。

「ええー、生徒はこれで全員ですか？」

小声だったがよく聞こえる。阿久津先生は一言、わからないと言った。

そして阿久津先生は一步前へ出ると、腕を直して生徒たちに指示を与えた。

「おい、代議員、人数確認をしろ。できたら俺のところに言いに来てい」

彼はいつも命令形。学校で有名な鬼教師。担当教科は体育だ。代議員はその場に立ち上がって、前から順番に人数を確認していた。

「なによあれ、えらそうに」

背後から裕子の声が聞こえた。憎たらしい口調である。

彩音は阿久津先生のことをよく知っている。確かに怒ると怖いし、口調も悪いけど、

やっていることはいつも正しくそして熱心なのだ。

だから彩音は先生を批判しない。というかあそこまで真剣になっくれる人を批判できない。

代議員が人数を数え終わり、先生に報告した後、

阿久津先生は「よし」と呟いて足元においてあった紙に手を触れた。

「どうやら全員揃っているみたいだ。では今から劇の台本を配る。
最前列の生徒は台本を取りに来い」

最前列の生徒は阿久津先生の機嫌を損ねないようにさつと動いた。
命令形の彼にムっとする生徒も多いが、それ以上に彼が怖いため黙
り込んでしまう。

生徒たちは紙を受け取り、後ろへまわしていった。

これが一般的な配り方。そして次は、二列目の生徒が取りに行く番
である。

そんな調子で三十枚ほどの藁半紙を配り終え、ようやく落ち着いた。

もうお気づきの方もいるだろうが、その藁半紙は劇の台本そのもの
である。

三十枚、半分に折って表裏。藁半紙の下の方にページが書かれてい
た。

「今からホッチキスを配るから、指示通りに折っていけよ。」

まずはここを半分に――」

阿久津先生は前で実演し、作業を進めていった。

やがてホッチキスもまわし終え、全員が一冊の台本を作り上げた後、

ようやくキャラクター紹介に突入というところであった。

「よし、じゃ今からキャラクターの紹介をしよう!」

阿久津先生は少し微笑んで言った。生徒たちの間から歓声が湧き起こる。

待ってました、というように彼らは一ページ目を開いた。

そのときだった。

「彩音!」

裕子だ。裕子はさきほどの不機嫌な口調はなくなっており、いつもの男っぽい口調でささやいた。

「主演のセリフ数見てみて!」

「え、うん。わかった」

彩音は言われた通り、台本の「主演：ピュネ」というところに目をやった。

そしてセリフ数を確認する。そこには二百三十四と確かに書かれていた。

彩音は驚いた様子で言う。

「なんでこんなに多いの!?!」

二百三十四なんて誰が覚えられるのだろうか。

しかも、これに感情表現や演技が入るとなると、明らかに異常な数

字だと思う。

「あんた行きなよ！ 白いドレス着れるよ？」

「えっ？」

「説明するからよく聞くように！」

阿久津先生が二人を見つめて叫んだ。ビクつとした二人は咄嗟に話をやめる。
フンと不機嫌そうに鼻を鳴らした阿久津先生は、また長々と説明を始めた。

（やつぱり、怖い……）

彩音は思った。でも、それ以上にさっきの裕子の言葉が気になる。

（でも白いドレスって……なんだろう？）

「主人公ピユネはセリフも多く演技も難しい。だが、やりがいはあるし、

格好良いセリフや感動するセリフが多い。もしやるとすれば一番目立つだろうな。

ただし……女子限定らしい！」

阿久津先生はふざけたように言った。生徒たちから笑いが漏れる。しかし、男子生徒の一人が叫ぶように言った。

「ってか、セリフむちゃくちゃ多いじゃないですか！？ こんなの絶対無理ですよ！」

他の生徒たちもセリフ数を確認する。ほんとだ、という声が飛び交う。

「安心しろ！ お前は男だからこの役は死んでも回ってこない。まあ、女装するなら別だけだなー！」

また微かに笑いが漏れる。

彩音はそのスキに裕子と話をしていた。

「さっきのことだけど、ドレスってどういうこと？」

それだけが気になる。

「こんなセリフの量だからさ、もしやってやろうという勇者様がいたら、

特別に白いドレスを着てラストシーンを演じることができるんだって！

それもめちゃくちゃ可愛いよ！ 一回見たけど、試しに着てみたくなるよきつと」

裕子は長々と答えた。どうでもいいが、初めて女らしい言葉が聞けたような気がした。

彩音は「ドレス」と「めちゃくちゃ可愛い」の言葉に反応した。とても綺麗で光るドレスを想像する。そして、キラキラと目を輝かせた。

「どうせやるヤツはいないよ。彩音、あんた昔から演技上手いし、

緊張とかあんまりしないタイプだろ？」

どうやら裕子は最初から彩音を主役に持つていくつもりだったらしい。

「だったらやってみなよ！　っていうか、ウチはあんた以外のヤツ
反対！」

そういわれて、なんだかやってみようという気持ちになってきた。

確かに、彩音は昔から劇の演技は得意だ。それは彼女自身も自覚していることだし、
自信もある。それに、小さいころからピアノの演奏会などに出演しているため、

余程の大演技でないかぎり緊張することもない。

また、英語なら記憶力が急激に低下するのに、こういうクラス劇になると

異常に記憶が早いのが彩音の特質である。

裕子個人は、彩音以外の生徒がこれをやる資格はないと思っている。
第一ドレスに似合う子は学年一可愛い彩音しかいないんじゃないか
と思う。

本当に最高の劇をするなら、キャラに合った声や顔の人が必要だ。
既に内容を知っている裕子にとって、もう彩音以外は考えられなかった。

彩音は他の役者のセリフ数を見つめた。

四十、十、二十五、三十三、どれも五十に満たないものばかり。
一つだけ百五というものがあつたがこれは男子限定。

彩音は迷った。五十以下だとヤリガイが無さ過ぎるし二百を超えるとさすがに手に余るものがある。

(うーん、どうしよう・・・)

悩んでいる間に先生の話がだんだんと進んでいく。

もう彩音にとって、主人公になるかならないのかしか頭になかった。

「紹介は以上だ！ 続いて内容についての説明をしよう」

内容か……。まず、それを聞いてみるのもよいかもしれない。

数十分に渡り、長々とストーリーを説明していった。

ここでこのキャラはこういう演技をする、など、そんなこと後でもいいだろうと

言いたくなるようなことまで説明をしていった。

他の生徒たちはもう説明を聞き飽きて、どの役に着くかを話し合っていた。

その中に、照明や音響に入る人たちや、小道具や大道具の制作を担当するという声も

拳がつていた。阿久津先生はそれでもなお頑固に最後まで説明を続け、ようやく言い終えた。

「なんとなくストーリーが頭に入っただろう。

では今からお待ちかねの役決めに入ろう！ まずは主役：ピュネからだ」

CHAPTER 7：役者紹介（後書き）

次で役が決定します。彩音が主人公をやるとは限りませんよ!？（笑）

え?じゃないのかって?さあ、わかりません^^

CHAPTER 8：決定

阿久津先生はそこまで言うと、松倉先生と交代した。

松倉先生はひよこひよこ前に現れ、ペンと紙を持って確認するようにつづいた。

「えー、では、主役：ピユネ役をやりたいと思っている生徒は、その場で手をあげてください！」

彩音は立ち上がろうか迷っていた。ストーリーは頭に入ったが、やはり決められない。

（どうしよう・・・いききたいけどなあ・・・）

責任が重い役はなかなか立候補しにくいものである。

やることいたらやめられない。第一この場合、代わりなんて誰もいないだろう。

しかも、演技力や感情表現を最後まできっちりこなすことができるだろうか。

「おい、彩音、どうしたんだよ？」

裕子は彩音を促した。どうした、なんて聞かなくてもわかったが、できれば彩音に立候補してほしいかった。

「ちょっと、まだ考え中・・・」

彩音は真剣そうだった。まあどうせ、他に立候補するやつはいないんだし、

焦らなくてもいいか。

「ええ、いないんですか」

松倉は口では戸惑っているように聞こえたが、やはりか、と言いたげな表情をしていた。

「では次の役から決めていきましょうか。次は・・・ヘイル役」

ヘイル、男子限定のセリフ数最大百五を演じる役である。

男子は引っ込み思案、というかちよつとでも無理だと感じればやらない主義なので、

案の定誰一人として立候補するものはいなかった。

そして、ピュネ役とヘイル役以外のキャラはすんなり決定していた。

とうとうこの二役を除いた最後の役が決められようというところまでできていた。

彩音は裕子に言う。

「やっぱり、失敗したときのこと考えると怖いよ。ちよつとあたしには出来そうに無い」

彩音らしくない、弱気な発言だった。

裕子はそれを聞いて、思わず叫びそうになった。

「お前さ、んなこと心配するのは学年に失礼だぞ？」

「え？」

「あんな長セリフをやるやつに文句言うやつなんて誰もいないよ。特にあんたみたいな子にはね。そんなくだらないこと心配してたらんだったら

安心して次は手挙げるよ！」

「・・・」

そのとき、最後の役をやる生徒が決まった。

残されたのはピュネ役とヘイル役。

周りはずでに、このままこの役に着く生徒はいないだろう的な雰囲気になっていた。

なにせセリフが多い上に長い。

しかもラストシーンなんて、かなり恥ずかしい演技をしなければならなかったからだ。

「では、再度確認します。ピュネ役をやりたい生徒はいませんか？」

松倉先生は焦った様子で言った。生徒たちは辺りを見渡す。どうせいないだろう、そう思いながら。

誰も手を挙げなかった。前を見渡しても後ろを見渡しても、舞台の上から眺めても手を挙げている生徒は見つからない。

やっぱり前半と後半にわけてセリフを分担しないと無理か……。松倉と阿久津は思った。ある程度予測できていた結果だし、それにセリフの分担は以前から検討されていたことだ。

よしそうしよう。二人は視線で合図を送り、その知らせを伝えようとした、そのときだった。

「私がやります!」

女子生徒の中から声が聞こえた。そして、その女子生徒は手を高々と挙げた。

誰だ? と思い、一斉にそちらに目をやる。

その瞬間、男子生徒から騒音に勝るほどの歓声が湧き起こった。

「さすがだぜ!!!!!! 彩音ちゃんよー!」

「ちょ、俺もう感動!」

「あゝパパ嬉しくて涙が・・・ウーンウーン!」

かなり大袈裟な演技だった。

でも、それに相応しいくらいの勇氣だろうと全生徒は思った。

「じゃヘイル役は俺がやる!」

男子の歓声は一瞬にして留まった。

あまりに意外な男、普段は絶対そんなことやるやつじゃないと思っていた男が手を挙げたからだ。

「おいーーーーー! てめえ彩音ちゃん目当てだろ!?!」

「最後の場面アレだもんな!?!」

「おいおい、ふじゃふってなんだよふじゃふって!」

女子生徒はキヤアキヤアと叫び、男子生徒はひたすら批判の声を挙げた。

『じゃヘイル役は俺がやる!』そう叫んだのは、サッカー少年山本隆一だった。

山本は「不純だ」と批判する男子生徒を無視して、生徒たちの間から彩音にピースした。

彩音はすっきりしたような笑顔を浮かべて、裕子と絡み合いながら、山本に視線を返した。

「なんとか決まりましたなあ。阿久津先生」

松倉先生は紙に二人の名前を書き込んだ。

阿久津先生は、ワアワアきやあきやあ騒ぐ生徒たちを見て、優しく微笑んでいた。

「山本は後で叱っておかなくちゃいけませんね!」

松倉は言う。阿久津はあっはっはと笑った。

CHAPTER 8：決定（後書き）

この部分、私自身「何書いてるんだろ、自分は」と思いました（泣）でもあっさり彩音がなりましたーなんてことにしたら、それこそ面白くないと思ったので、

あえてギリギリまで引っ張りました。

なので、大袈裟な部分が多いかもです。

CHAPTER 9：意識

涼はどの役にも付くことはなく、その二時間を終えた。

正直、文化祭なんて興味なかった。面倒くさい。つまらない。だるい。

当日も休もうと思っている。どうせ役はないんだ。休んだって迷惑にはならない。

今日も本当は学校なんて来るつもりはなかった。

あの女に、あんなことを言われてなければ・・・。

あの女はまだ会って数日しか経っていない。

なのにあんなに馴れ馴れしく、ほんと意味不明だ。

でも何故かうつとうしいとは思わない。むしろホっとする。

ああ、これが友達というもののなのか。だったら早めに切り捨てたほうがいいかもな。

友達は昔、何十人といった。その中でたった一人だけ親友と呼べるやつがいた。

でも、俺と別れる数日前、交通事故で死んだよ。

それ以来友達なんて作る気はなくなった。どうせ、友情を刻んだ分だけ別れが悲しくなる。

そしてその都度、涙というものを流さなくちゃいけない。

だったら、最初から友達なんか作らなきゃいいってことだろ？

今は誰とも話す気なんてない。そっとしておいてくれればいい。

どうせ後二年ちよつとの付き合いだ。それが過ぎたらみんな泣く。自分はその悲しみを味わなくて済むのだ。

だいたい学校に来ている意味ってなんだろう？

こうして一人でいると、その答えを見つけたくなる。

友情を分かち合う場とか、人間形成をする場だとかいうのは所詮キレイゴト。

だったら勉強の場？将来生きるための学歴を残す場？

ああ、少なくともそれが最も近い答えなんだろうと思うな。

次の授業は英語だ。涼の一番得意な教科。だけど、なんだかつまらない。

そう感じるものが最近多くなってきていた。

多分、授業内容がワンパターンだからだろう。

挨拶をし、前回の単元の復習、そして本文を読む。ノートに写す。終わり。

毎回この流れだから疲れる。たまには何かすればいいのに。

「good morning everyone!」

内藤先生の挨拶が始まった。隣にはALTのエイレナがいる。

生徒たちは元気良く返事をした。涼は相変わらずのこと、全く口を開かない。

そして挨拶が終わった後、予定通り前回の単元の復習を始めた。

（ワンパターンすぎてつまらないなあ・・・）

涼にとっては英語の復習なんてオマケの時間でよかった。
他の生徒に合わせていると、英語の授業なんて進むはずが無い。

「白石さん。答えてください」

白石彩音……。そういえばこの子、いつも当てられているような気がする。

「は……。はい。ええと……」

いつも答えられない。

そしてそのたびにまた先生が呆れたように言う。

「白石さん、貴方本当に勉強しているんですか？」

内藤先生は黒板をゴンゴンと叩きながら、続けて言った。

「この程度の範囲は、出来て当然ですよ。入試にもです」

「はい……。すみません」

周りの生徒はクスクスと笑う。いつもならどうでもいい笑いだ。
でも、今日はそれが何故か腹立たしく思えた。

涼は彩音のほうを見遣った。彩音は困ったようにうつむいている。
反省か、恥か、涼にはわかるはずがなかった。

英語の授業は相変わらず刺激の無い状態で終了した。
チャイムが鳴り、英語の挨拶を済ませ、休憩時間に入る。

（またつまらない休憩時間がはじまった）

涼は思った。でも、暇つぶしのスキルなら習得済みだ。

涼は「死ぬとき人は何を思うのか」という題名の本を手にとって読み始めた。

「川村君、何読んでるの？」

と、彩音の声。

（せっかく人が本を読もうと思っていたところを）

涼は本の題名を見せた。彩音はその場にしゃがんで、ぎこちない口調で題名を読んだ。

「死ぬとき人は何を思うのか？・・・変わった本読むんだね」

（なんか悪いかな？）

彩音という本を読む気がなくなってくる。

以前も図書室で邪魔をされたが、あのときも本に集中できなくなっていた。

涼は本を片付けた。そして無愛想に言う。

「いつもいるけど、俺になんか用？」

そして彼女の目を見つめる。綺麗だ。とても澄んだ、とてもきらめいた・・・。

(やめよう)

涼は自分自身に言いかけた。また発作^{アレ}が出てしまつかもしれない。

「別に用はないけど……。なんか喋ろうと思って」

彩音はニコつと笑った。

涼は彩音に言いたいことがたくさんあった。

そうやって話しかけてくるのやめてほしい、一人にさせてほしい、相手にしないでほしい、余計な気を遣わないでほしい、変な約束をしないでほしい、俺はお前の事を友達ともなんとも思っちゃいない。

でも、いざ彼女と向かうとその言葉が言えない。

彩音が傷ついてしまうのが怖い。

何故か自分の中で、考えとは別の意思が邪魔をし制限をかけてくる。

「ふーん、で、何喋るの？」

(なに話進めようとしてんだ俺は)

「そうね・・・」

彩音は視線を宙に泳がせて考えた。

「あ、川村君で英語得意だよね!？」

(なんでそんなこと知ってるんだよ?)

「ああ」

涼はなんとか自分を維持しよう意識した。

拒絶的な発言や、内気な発言をするといったことに意識をしているのではない。

これらの言葉は彼女に対して言うことはできないだろうから。

むしろ話につられて、一緒に楽しんでしまわないようにする意識だ。

「今日の昼休み教えてくれないかな？ あたし英語全然ダメなの」

（さすがにそれはできないよ。悪いけど）

「え・・・」

でも、嫌と言えない。

「あ、うん。わかったよ」

（何をしているんだ俺は）

意味がわからない。なんで拒否できないんだろう？

涼は、嫌だと思つ反面、嬉しいと思つている自分がいることに気付いていなかった。

ただひたすら自分を責めることしかできない。

「彩音っちー！」

そのとき、近くで何者かの声がした。

「一緒に遊ぼうよ！」

見たことはあるが、名前はわからなかった。

「うん、わかった」

彩音は返事をした。そして、涼に「じゃあね」と言い残して去って
いってしまった。

（なんだよ……。なに残念そうにしてんだよ……。俺は）

CHAPTER 9：意識（後書き）

これはストーリーではなく文章的にマズかったかも、と思います。
でも、なんか、書いていました（汗）

この後、だんだんと二人の関係が深まっていく！？
次回、お楽しみください。

CHAPTER 10：初めての昼食

一週間と三日が経った。

月曜日。彩音は相変わらずギリギリの時刻で、教室の扉を開けた。

この一週間、彩音は劇の練習でいっぱいだった。授業中考えることといえば劇の演技のことばかりで、とてもじゃないが勉強に集中できる状態ではなかった。

そのかいあって、今ではラストシーンを除いた全部のストーリーをこなすことができる。

しかし、問題はそのラストシーンだ。ヘイル役の山本と、キスギリギリで照明を消していき、当たる寸前で終幕するというものの。

これは練習の段階からとても危ないものである。下手をすればあんなことにもなりかねないからだ。

というか、一年生にこの劇の内容は不適切ではないのか、と思わされる時がある。

といっても先生に何の落ち度もないし、生徒がつくったオリジナルストーリーなのだから

こんなドラマチックな仕上がりになったのだと思う。

第一、ストーリーを知った上での立候補だったのだから、今更彩音に何も言う資格はないが。

「おはよう」

生徒たちは口々に言う。彩音は元気良く返事をした。

その中に、嬉しくも涼の姿があった。

涼は相変わらず無口だったが、だんだんと彩音に心を開いてきていた。

英語もたくさん教えてもらったし、読書についても色々話し合った。

それでもやはり大きな壁は取り除かれていないように思うが、今はまともに話してくれるだけで十分嬉しかった。

「おはよう、川村君」

彩音は涼の前に立ち、殆ど頭の上から呟いた。

「ああ、おはよう」

無愛想だったが返事をしてくれる。彩音はそれだけで十分だった。

彩音はご機嫌で配膳台のプリントを取り、さっそくそれを始めていった。

—— 昼食の時間。

涼は、いつものようにパンを取り出し、一人で昼食をとろうとしていた。

別に寂しくは無かった。一人なんて、何ヶ月も経てば慣れてくる。最初は周りがうらやましく思ったりもしたが、今はもう平気だ。

自分の周りに、他を拒絶する壁をつくれればいい。ただそれだけのことであったのに……。

「川村君、今日は一緒に食べよ！」

あいつがくる。あいつはいつも、自分の一人の時間を邪魔しようとする。

そして、あいつはとうとう自分の昼食の時間まで侵食しようとしていた。

「ああ、うん」

しかし断れない。断ろうとしても、口がきちんと働いてくれない。

だが、最近は彼女という時間がまんざら嫌でもなくなっていた。

ううん、むしろ何よりも大切な時間のように感じられる。

なぜだかわからないが、自分の中で完全に彼女を受け入れるようになっていた。

（なんでだろうな……。こいつといると、何故か楽しい）

彼女と会うことだけが、学校での唯一の楽しみ。

彼女と共に話すときだけが、唯一心が落ち着く瞬間である。

彩音の綺麗な瞳が、涼の目を見つめる。

涼は、恥ずかしくなって無意識に目をそらした。

「川村君は、文化祭の劇で何やるんだっけ？」

彩音は無邪気に質問した。しかし、涼は一瞬ドキつとする。

「え、ああ、俺小道具だよ。だから劇には出演しない」

ウソをついた。だって、^ハ当日休むから何もやらない^ワなんて言えるわけが無い。

「ふーん。じゃ、応援しててよね！ こう見えても、けっこうきついんだよ？」

（なんとか誤魔化せたな・・・）

「ああ、確か、セリフ二百以上あるんだっ たよな」

涼は心の中でふうつとため息をついた。

しかし、彼女にウソをついたことは、たとえ仕方ないといえども胸が痛んだ。

その後は、殆ど文化祭のことで話が進んだ。

涼は上手くその場で作り話をし、なんとか昼食を終えることが出来た。

（危なかった・・・。ほんと、バレてたらショック受けるだろうな・・・）

でも、なんだかんだ言っ て、涼は嬉しかった。そして、心の中で初めてこう呟いた。

（ありがとな）

CHAPTER 10：初めての昼食（後書き）

これからどうなるんでしょうね・・・。

涼もだんだんと心を開いてきて、彩音を意識してき始めましたが、彩音は涼のことをどう思っているのでしょうか？・・・

まだ誰にもわからない状態です。ええ、私にも^^

CHAPTER 11：ラストシーンは最難関

——金曜日の放課後。

音楽室で、彩音と山本、代議員と文化祭実行委員と観客が居残って劇の練習をしていた。

時計の針は五時半を指し、もう空も夕焼けに染まってきている。

「山本君、もう少し早く顔を近付けて！」

一年生実行委員長が言う。山本は頭をかがいて、ごめんと一言呟いた。

もう彩音も山本も、ラストシーン以外は完璧であった。

二人ともセリフも感情表現も演技も見事で、その部分だけなら今からでも十分発表できる。

だが、ラストシーンだけはどうしても上手くいかなかった。

なぜなら、あまりに顔が近いために山本が緊張して引いてしまうからである。

また、隣でそれを観察する女子たちがきゃあきゃあ騒ぐのにも反応して、

ついタイミングがずれてしまうのであった。

ゆっくりと明かりが消えていくのに合わせて口を近づける。

そして、明かりも消え、幕も閉まったと同時に額をぶつけてキスを回避するという演技だ。

これがまた難しく、少なくとも早すぎるとマズイことになってしまったため、

山本はいつも引き気味であった。

「それにしても、彩音もあんなことよくやれるねえ」

裕子が呟いた。というか、最終的にやれと言ったのは裕子だろうに。

「ほんと、すっごい勇氣！」

千倉という女子生徒が頷きながら言った。

「白石さんもきつと嫌だと思う。でもそれ以上に責任を感じているのよ。」

それに比べて山本は、勢いに任せてあの役についてちゃったからね」
知恵も辛辣そうに言う。

山本が悪いわけではない。そもそも、中学生にこの演技が早すぎるだけなのだ。

他の男子でも、逆に他の女子が彩音に変わったとしても、山本同様、遠慮して引いてしまうであろう。特に女子は。

「てかさ、ヘイル役を女にやらせればやりやすかったんじゃない？」

裕子は言う。確かに、女が男役をやればキスシーンだってやりやすい。

「それ以前に先生がこんな劇をよく許したよね。」

もし失敗して初キスもっていかれたら、山本君はどうかしらないけど

白石さんは少なからずショックよ」

知恵は皮肉っぽく言った。でも、間違っではない。
いくら演技ともいえず、少々これはレベルが高すぎるしリクスも高すぎる。

いったんそこで休憩をすることにし、山本は男子生徒の群れに戻っていった。

そして群れに入った瞬間、ひざについて落ち込む。

「あれ無理だ・・・白石の絶対領域を侵せそうにない・・・」

山本ははあっとため息をついて言った。男子はそれを励ますように言う。

「仕方ないだろ。まあ失敗しても俺ら気にしないって!」

「そうそう、どうせ俺らでもあれは無理だから」

こいつらは何もわかつちやいない。山本は思った。

あの演技での失敗は彩音を傷つけることになるかもしれないということ。

彩音は女子生徒の群れに戻っていった。

「彩音っち凄いや! あんなのウチじゃ絶対できない! ってか、やりたくない!」

早苗は尊敬の眼差しで彩音を見つめた。

「あはは・・・」

彩音は苦笑する。裕子は彩音の肩に手を置いてささやいた。

「あんたは悪くないよ。山本があと一步踏み出すかどうかだよ・・・」

（でも個人的にあれ以上近づくのはきついかも・・・）

彩音は何も言わず、また苦笑した。知恵もまた、彩音のそばに現れて呟く。

「仕方ないよ。この劇ハードル高すぎ。中学生がやる劇じゃないよ。白石さんも、他の中学でキスシーンのある劇とか聞いたこと無いでしょ？」

「うん・・・」

「白石さん、お疲れ様」

一年実行委員長はいきなり現れてそういった。

「え？」

「今日はもういいよ。十分やったし、疲れたでしょ。来週の二日使って完璧に仕上げよう！」

少し困惑の表情を見せたが、彩音はこくんと頷いた。裕子たちは彩音のかばんを取り出しそれを手渡す。

「帰ろう！」

「うん」

五人は委員長にバイバイと言って音楽室を後にした。

「おい、終わりだってよ。俺らも帰ろうぜ」

男子生徒の一人が誘った。他の男子も賛同する。

「山本、お疲れさん！ まあまだ後二日あるから焦らず行こうぜ」

「ああ、ありがとな」

山本はかばんを受け取る。そして、勢いよくぱつと立ち上がった。

文化祭本番は来週の水曜日。それまでに、間に合わせることが出来るか……。

CHAPTER 11：ラストシーンは最難関（後書き）

頑張れ彩音！頑張れ山本！

次回、いよいよ涼の隠された秘密に迫る・・・！？

CHAPTER 12：不可解な言葉

——文化祭前日。

もう翌日の文化祭の準備も終わり、後は最終確認をするだけであった。

文化祭は体育館で行われる。したがって、今体育館を使うことは出来ない。

生徒たちは音楽室に集まり、劇の最初から最後まで真剣に通していた。

いよいよラストシーン。ここまでは完璧に進んでいる。

山本と彩音は向き合った。緊張と興奮のキスシーン、二人の修羅場のキスシーンだ。

「うおおおおおおおおお!!」

「きゃあああああ!!! 彩音————!!!」

生徒たちはだんだんと顔が近づいていく二人に、まるで酔い狂った大人のような大声を上げていた。

「アタルアタルアタル!!」

「あれチヨ————やばいよ!!!!」

裕子、知恵、千倉は生徒たちと離れたところでその様子を見つめて

いた。

「完璧だね。あーあ、あの二人もうプロの域に達したんじゃないの？」

裕子はどこか得意げな顔をして言う。

もう何百回とその練習を見てきた三人にとって、何が成功で何が失敗かがすぐ見分けられる。

今回の成功。タイミングも完璧だった。

そして、そう呟いた瞬間、一年実行委員長が音楽室の明かりを消した。

彩音は山本は咄嗟に頭を前に出した。ゴツンという音が鳴る。そしてすぐに顔を離して隣に並び、生徒たちに向き直った。

明かりがついた。

「おおおおおおお！！！！　むちゃくちゃすごかったぞおお！！！！」

「うわぁ・・・ちょっとマジでこっちまでドキドキしちゃった！」

「すごいよあんたら！　もうそのままプロ目指せば！？」

口々にいい、そして盛大な拍手を送った。

生徒たちも、まさかここまで凄いモノになるとは思わなかったのだ

ろっ。

男子も女子も、耳を塞ぎたくなるくらいに興奮状態になっていた。

後は、本番で成功させるだけだった。

「よし、今日の練習はこれで終わりだ。みんなお疲れ様！」

実行委員長は手をパンパンと叩いて注目させた。

「明日、絶対成功させような！」

「「オーーーーー!!!!!!」」

——生徒一同。

彩音は額から流れる汗を拭き、裕子たちのもとへと戻った。

「ふう……。なんとか一発でうまくやれたよ」

安心したようにそう呟く。知恵は皮肉っぽい誉め言葉を送った。

「なんとか？ もう貴方たちは完璧でしょ」

裕子と千倉は立ち上がる。裕子は知恵に賛同するように言った。

「うちもそう思う！ なんとか、なんて中途半端な出来じゃないだ

る？」

「あはは、ありがとう」

彩音は微笑んで言った。

この調子でいけばきっと成功する。彩音はちょっとした自信が持てた。

そして、ここまで来れたのは早苗を入れたこの四人のおかげだと心から思った。

「あ、そういえば涼はいる？　ちょっと話したいことがあるんだけど」

彩音は話を変えて聞いた。

「いいや、見てないなあ。今日はもう帰っちゃったんじゃないか？」

裕子は答える。彩音は千倉にもたずねるように視線を移した。

「私も見てないわ。知恵、何か知らない？」

千倉は視線を知恵に移す。彩音も知恵のほうを見た。

知恵は考え事をしていたのか、二人に見られてはっと気付いた。

「え、あ、どうしたの？」

やっぱり考え事してたのか。まあ、知恵の場合いつものことだが。

「涼、どこにいるか知らない？」

彩音のかわりに千倉が聞いた。

知恵は、彩音と千倉を交互に見つめて、いつもの辛辣さで呟いた。

「彼ならもうとつくに家に帰ったわ。学校が終わったらすぐにね」

そして知恵はポケットから小さな占いの本を取り出し、パラパラっと今日の運勢を確かめ始めた。

裕子はその話を聞いて、悪態をつくように言う。

「なんだよあの野郎。今日が最終だったのに、最後まで付き合えよな！」

とても怒り口調だった。

裕子は少なからず、涼に対して不満を持っていた。

なぜなら、裕子が涼に喋りかけてもほとんど無視だし、

それにクラスがどんなに悪い状況であっても全く興味なしといった表情をしているからだ。

彩音は苦笑いを浮かべてなだめた。

「まあまあ。きっと明日は来てくれるよ。それで十分じゃん」

少なくとも、彩音にとってはそれで十分だった。

裕子はそれでも納得がいかないようだったが、震えながら不満をおさえていた。

しかし、次の瞬間知恵は衝撃的な言葉を口にした。

「話の腰を折るようで悪いけど」

占い本の次のページを開く。そして顔を上げ、三人を交互に眺めていった。

「彼、明日は学校に来ないわ」

——え？

一瞬、何を言っているのか理解できなかった。

彩音は知恵の不可解な発言に耳をうたがった。

「え、ちょ、どうということ？」

知恵は全く興味なさそうに、ただ占いの本を見つめていた。

彩音はひざをつき、知恵に顔を近付けてもう一度問う。

「知恵、どうということよ？」

彩音の声は焦っていた。だって、知恵が冗談を言う子ではないと知っているから。

知恵は本をパタンと閉じた。

「先日彼が自分で言ってたわ。文化祭の日、俺は休むってね。なんで私にそんなこと言ったのかは知らないけど、確かにそう聞いたわ」

ウソを言っているようには思えない。きっと本当なのだ。

「ちょ、知恵、それほんと!？」

裕子は眉をひそめて執拗に聞いた。

「もしかして、ズル!？」

千倉も裕子と顔を見合わせて言う。

彩音は急に立ち上がり、三人を残して音楽室を飛び出した。

「わ、ちょ! 彩音!！」

「どこいくのよ!？」

しかし、気付いたときにはもう彩音は視界からいなくなってしまうていた。

知恵はゆっくりと立ち上がり、はあっとため息をついていつも以上に呆れた様子で呟いた。

「あんな引きこもり、放っておけばいいのにね」

彩音は涼の家へと向かった。門を抜けて外に出る。

そして、以前知恵から受け取った地図のルートをたどりながら、止まることなくただひたすらに走り続けた。

（もう！ 川村君、何考えているのよ！）

今回ばかりは、彼の行動が理解できなかった。

だるいとか、つまらないとかいう問題じゃない。

学年劇だから、学年が一つにならないと成功するはずが無いじゃない！

十月の冷たい風が肌に触れる。

そして、周りの景色がいつもより物寂しく感じられた。

彩音は通りを右に曲がった。

そして、左手に見える三番目の家。白くて綺麗な壁と赤くて特徴のある屋根。

あそこが、涼の家だ。

彩音は息を整えることもせず、慌てるようにチャイムを押した。

「ピンポン ピンポン」

以前も聞いた、この効果音。彩音は深呼吸をして返答を待った。

パチっという音がする。

「・・・はい」

「桜平岡中学の者です！」

彩音は半ば怒り口調であった。

チャイムの向こうから聞こえてくる可愛らしい声は、以前ここを訪れたときと変わらない対応で彩音を迎えた。

「あ、はい」

プチッと通信の切れたような音がする。

少しそこで待っていると、家の玄関扉が開いた。

「あ、貴方はこの前の？」

「はい！ あの、涼君いませんか！？」

なんだかんだと前置きもせず、単刀直入に聞いた。

女性は少しびっくりしたような顔を見ると、すぐに普通の顔に戻って答えた。

「まだ帰ってきてないわ」

「じゃ、どこにいるかわかりませんか！？」

彩音は止まることなく続けて質問をした。

しかし次の女性の顔は不思議そうに彩音を見つめていた。

「いいえ。・・・でも、どうして？」

「涼君が、明日の文化祭休むって言ってたらしくて・・・。それで、話がしたいんです！」

「・・・」

女性はちよつと驚いた様子だった。もしかして、マズイことを言っ
てしまったか。

そして、それと同時に彩音は大変なことに気がついた。

（あ・・・なんて口の利き方してたんだろう・・・。落ち着こう）

落ち着こう・・・。

彩音は心の中で呟いた。

そつだ、相手は涼じゃないんだ。

いきなりこんな怒り口調で言いたいこと言っ
て、失礼じゃない・・・。

「ごめんなさい・・・」

咄嗟に謝る。

「いえ・・・」

女性は少し寂しそうな顔をした。

彩音はそれを、気を悪くしてしまったと勘違いした。

「あの・・・ほんとにごめんなさい。いきなり・・・あんな聞き方して・・・」

彩音はすぐに頭を下げた。

「違うの」

女性は呟く。

「そんなんじゃないくて・・・」

彩音は頭を上げた。

「え？」

「ちょっと、姉さんのことを思い出しちゃって」

「？」

何を言い出すのだろうかと思った。

彩音は変な顔をして首をかしげた。

そして、次の瞬間、彼女はとても意味深な言葉を発した。

「明日は、あの子の母親の命日なんです。きっと、あの子はそれで・
・」

——「はい？」

彩音はますます意味がわからないと言いたげに声を漏らした。
しかし、そのときだった。

「由紀姉さん、何を話してるの？」

CHAPTER 12：不可解な言葉（後書き）

涼の母が発した不可解な言葉。

．．．．．ええ、いったいどういうこと！？

次回、涼の隠された過去が明らかになります。

CHAPTER 13：隠された過去（1）

女性と彩音は、声のするほうを見遣った。

そこには、とても寂しげな表情をした涼の姿があった。

「由紀姉さん・・・ちょっと席を外していただけますか」

とても丁寧な物言いだった。しかも、この女性に言っているようだった。

（どういうこと？ この女の方は、涼のお母さんでしょ？）

彩音の頭の中は混乱していた。

（それに、明日は涼の母の命日って・・・）

ますます意味がわからない。

だったら、自分の目の前にいるこの女性は涼の母親じゃないってこと？

「・・・わかったわ」

女性はくるっと振り向いた。

そのとき一瞬だけ見せた、哀しげな表情が気になる。

涼は、その女性が家の中に入ったことを確認すると、彩音に近づきながら消えそうな声で聞いた。

「白石……由紀姉さんに、母さんのこと、聞いたのか？」

どうやら彼女は由紀という名前らしい。

涼は彩音のそばまで来ると、真剣な眼差しで彼女を見つめた。

彩音は何故か悪い気がして、涼から目をそらして頷いた。

「そうか……。由紀姉さんは、母さんの妹なんだ」

涼はいつもの淡々とした口調を失い、深い悲しみの目をして呟いた。

そういえば、あの女性——由紀さんもそんなことを言っていたような気がする。

『ちよつと、姉さんのことを思い出しちゃって』

彩音は事情がだんだんとわかってきた。

でも、これは深く聞いちゃいけないことだと思った。

明日、涼は本当に用事で来れないということがわかった。

それ以上は何も聞くことは無い。聞いてはいけない。

「あの、川村君——」

あたし、帰るね。そう言おうとしたが、涼はその言葉を遮った。

「なあ白石」

空を見上げる。

「・・・」

彩音は返事をしなかった。

いや、できなかったのだ。

涼は何かしらの決心をした口調でこう言った。

「母さんのこと、聞いてくれるか？」

「え・・・」

彼の表情を見れば、それがきつと辛いことなだと予想できる。

空を見上げ、悲しみに潤む目を隠そうとしていることも安易にわかる。

どうしよう・・・。聞いちゃいけないってわかっていても、断ることができない。

何故か、断ってはいけないような気がする。

「うん・・・」

聞いちゃいけないことが、聞かなくちゃいけないことに感じられるのは何故？

好奇心でもない。別に聞きたいわけでもない。

でも、彼を見ていると、どうしても断ることができそうになかった。

「俺の母さんは――」

そして彼は、衝撃の過去を語り始めた。

僕は自分の全てを彼女に話した。

何故彼女に話そうと思ったか、そのときは全然わからなかった。

でも、今ならわかるような気がする。

僕はきつと、彼女に自分の事を知ってもらいたかったんだ・・・。

CHAPTER 13・隠された過去（1）（後書き）

CHAPTER 14：隠された過去（2）

——「お母さん！ お母さん！」

まだ声変わりもしていない、小五、小六くらいの少年の声。

「お母さん！ あれ・・・お母さん？」

とても陽気な声で叫ぶが、リビングにもキッチンにも母の姿が見当たらない。

「あれ・・・今日は出かけてるのかなあ」

母は専業主婦で、出勤していることはない。
だとすれば、外で近所のおばさんとお喋りしているのか？

「まあいつか！」

少年はリビングのソファに座った。

そして、テレビのリモコンを取る。

そのときだった。

「ピンポーン」

「？」

少年はリモコンを置いて、玄関のほうへ向かった。

「はい」

扉を開けた。そこには、とても険しい顔をした隣のおばさんが立っていた。

「涼君、お父さんが大変なことになってるの！ 早く病院に行きましょ！」

「え？」

このときの僕は何も知らなかった。

考える暇もなく車に乗せられ、町の中央病院へと向かった。

どうやら父が交通事故に遭ったらしい。

それも、大型トラックにはねられ、重体だったそうだ。

僕はその話を聞いて心配になり、車を降りたとたんに走り出し、急いで手術室のほうへ向かった。

看護師さんに案内され、僕は手術室の手前まで来た。

そこには、残念そうな顔をする医師と、

顔をおさえて涙を流す母の姿があった。

「いやあああああああー！」

あ那时的母の叫びは今でも忘れられない。

僕はもう、知らされなくとも何が起こったのか理解できた。

父は死んだ。別れも言わずに。

母はそれ以来、魂が抜けたかのように放心状態になってしまった。

僕がなんとか慰めようと声をかけても、決して返事をすることはなかった。

そして、精神的なショック故か、母は日経つにつれだんだんと痩せこけていった。

日に日に元気を失っていく母を見て、僕は毎日のように心が痛んだ。

僕が大好きだった母の笑顔も、喜ぶ姿も、頭を撫でる手も、もうなくなってしまうていた。

僕はなんとか母を元気付けようと、必死で考え必死で努力した。

母の笑顔、母の言葉、母の愛情、それが欲しかったために、僕は必

死で努力した。

あのころに戻りたい。あの幸せな母の姿を取り戻したい。

そのときの僕の頭の中にはそれしかなかった。

あるとき僕は、数ヶ月前に出した書道作品が入賞していて、学校で賞状を受け取った。

僕は震えるほど喜んだ。これで少しでも母に元気が戻るかもしれないと思うと、

涙がたまるような思いだった。僕は急いで下校し、一目散に家へ向かった。

きつと喜んでくれる。自分の息子が賞状を貰ってきて喜ばない母などいない。

きつと、きつと、またあの笑顔を見せてくれる。

僕は思い切り玄関を開け、真っ先にリビングへと向かった。しかし

「おか・・・さん？」

全身に震えが走った。力が抜け、賞状を落とす。

「お母さん！ お母さん！」

そこには、血を吐いて倒れる母の姿があった。

僕は慌てて駆け寄った。

「起きてよ！　ねえ！　お母さん！」

近くには茶色いビンが転がっていた。中はカラッポで、一粒の薬も残っていない。

まさか、これを一気に・・・？

僕は母の身体を揺すり、泣いて叫んだ。

「お母さん！　お母さん！　おかあさーーーーーん！！！！！」

無駄だった。悲鳴を聞きつけた隣の夫婦がすぐに駆けつけ、

救急車を呼んだが、もう既に手遅れであった。

精神的に追いやられ、耐え切れなくなったのであろう。

母は静かに眠りににつき、二度と息を吹き返さなかったという。

僕は誰もいないリビングの中で、ただ一人ひざについて呟いた。

「なんで……どうして……どうしてみんな先に逝っちゃうの？
どうして、一緒にいてくれないの？どうして誉めてくれないの？
どうして笑わないの？」

涙が零れ落ちる。

「寂しいよ……。ねえ、お母さん……。お母さんは、本当にそれで満足だったの？」

「……答えてよ。ねえ！」

寂しかった。胸が押しつぶされそうで、心が病んだ。

どうしてなの？

お母さん。どうしてなの？

寂しいよ。これからどうやって生きていけばいいの？

お母さんのこと、大好きだったんだよ？

お母さんの笑顔を見るだけで、幸せだったんだよ？

お母さんと一緒にいるだけで、満足だったんだよ？

お母さんが死んだとき、とても胸が痛かったんだよ？

お母さん、僕の賞状見てくれた？

喜んでくれた？ 誉めてくれた？ 笑ってくれた？

お母さんが喜んでくれないんだったら、あんな賞状、ただの紙切れだよ。

お母さん、僕といて幸せだった？

喜んでくれた？ 誉めてくれた？ 笑ってくれた？

ねえ、お母さん。もう・・・・・・・・・・会えないの？

僕はそれから40度の高熱を出した。

熱は一向に冷める様子もなく、危篤状態だったそうだ。

そのときの記憶は定かではない。

でも目を覚ましたとき、僕は激しい頭痛に見舞われたのを覚えてい
る。

眠っている間、僕はひたすら「お母さん」と叫び続けていたらしい。

熱は冷めた。しかし、僕はその代償として、もう一つの病に侵され
てしまった。

それは、相手の心の悲しみを知ることが出来る瞳。

僕はその病にうなされた。見たくないものまで見えてしまう。

とても残酷で深い悲しみが、目を閉じていても映し出される。

僕はその瞳をなんとかコントロールすることに成功した。

それは、何も考えないこと。誰とも話さないことだった。

僕の変化に最初に気付いたのは親友の雄一だった。

いくら話しかけても拒絶し無視をする僕に、雄一は怒鳴り声を上げて叫んだ。

「もつと頼ってくれよ！ 俺たち親友だろ！？」

どんなときでもいつも一緒だって、そういつてたじゃないか！」

その言葉に僕は心を打たれた。

俺たちは親友。そうだ、俺たちは、あのとき約束したじゃないか。

僕は涙を流し、雄一と静かに抱き合った。

ありがとう。

心の痛みが引いていく。とても暖かい気持ちになった。

しかし――

「うわあああ!! うわあああああああ!!!!」

そのとたん、雄一の過去が映し出された。激しい頭痛が涼を襲う。

瞳が暴走しだしたのだ。目が焼けるように熱い。

――やめてくれ!

僕は走り出した。

「あ、おい! 待てよ!」

追いかけてくる雄一。

来るな!

頼む！

ついてこないでくれ！

俺は大丈夫だから！ 俺は……。

歩道を通過したとき、ちょうど信号が赤になった。

僕は振り向く。しかし、雄一はそれに気付いていない。

「ゆ、雄一！ 危ない！」

僕は必死で叫んだ。しかし、次の瞬間雄一の宙に舞う姿だけが目に飛び込んできた。

僕の前で、大切な人が消えていく。

僕は雄一の葬式に出向くことは無かった。

僕のせいだ。今更、あいつに合わせる顔がない。

僕はお母さんの妹、川村由紀に引き取られ、名前も富田から川村へと変更することになった。

しかし、今となってもこの瞳は治らない。

今もまだ、その瞳が見せる悪夢にうなされつつけているのだった。

CHAPTER 14：隠された過去（2）（後書き）

涼はそれ以来、友達をつくるのが嫌になってしまったんです。
楽しくなる自分が怖かった。

友達なんていない。

涼は生き地獄という運命にめぐり合ってしまったのです。

CHAPTER 15：雄一の面影

「俺も此処に来る前は、結構喋るやつとかいたんだ。親友って呼べるやつは雄一だけだったけど・・・。でもよ、やっぱりあのときは――」

「やめて!!!」

空を見ていたから、彩音の涙に気付かなかった。

彩音は涙を流して、涼の胸に飛び込んだ。

「もういい・・・もういいよ・・・」

涼の胸の中で涙声がこだまする。

なんだろう・・・

苦しいけど、寂しいけど、暖かい。

「そんなに・・・苦しいんだったらさ・・・」

彩音は言葉を発するのも必死で、ところどころでつかえながら言
った。

「もっと頼ってくれたっていいじゃない！」

『もっと頼ってくれよ！』

なんだよ・・・これ。

「そんなに苦しいなら・・・我慢せずに、泣けばいいじゃない！」

お前は、雄一なのか？

「なんでそうやって強がるの！？」

お前は、俺の親友なのか？

「空見て、涙こらなくたって・・・」

・・・違うよ。

涼の胸の中で、一筋の光が差したような気がした。

一瞬、雄一の影が、彩音と重なったような気がした。

でも、彩音は雄一とは違う。決定的に違うんだよ。

影は重ならない。お前は、あいつの代わりにはなれないんだよ。

数々の苦い思い出がよみがえる。

胸の中、心の中、頭の中、色々な思いが駆け巡る。

しかし――

「っ!?!?!」

なっ!?!こんなときに――

「うっ!?!うわあああ!?!?!」

頭が割れそうに痛む。涼は、彩音を突き放した。

「っ!?!?」

彩音もびっくりしたようだった。

――『どんなときでも、いつも一緒だって』

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・」

痛みはすぐに引いた。気がつくと涼は、息を切らしてうずくまっていた。

彩音の白い脚が見える。

涼はよろめきながら立ち上がった。

「ごめん……。びっくりさせちまったな……」

彩音はまだ泣いていた。

必死で涙をぬぐっている。

涼は、とても哀しげな目をしてゆっくりと言った。

「俺……家に入るわ……。その……。話聞いてくれて、ありがとう」

「……」

あいつは、雄一とは違う。

っていうか、雄一と一緒にしたくない。

雄一の代わりなんていないんだ。

雄一は、俺のたった一人の親友なんだ。

彩音の言葉が胸に残る。

『もっと頼ってくれたっていいじゃない！』

CHAPTER 15：雄一の面影（後書き）

涼は誰よりも辛い思いをしてきました。

それを慰めようとする彩音さえも拒む、涼の瞳。

いよいよ明日は文化祭。果たして・・・

CHAPTER 16：桜平岡文化祭

—— 次の日の朝。

学校にはもう、一年生が劇の準備を始めていた。

文化祭は三日に分けて構成されている。

一日目は一年生、二日目は二年生、三日目は三年生の劇だ。

そして三日とも、昼から各クラブによる催しがある。

彩音は体育館舞台控え室に入った。

控え室にはもうすでに、出演する役者が集合していた。

「おはよう」

彩音は言う。生徒たちは振り向いた。

「あ、彩音。おはよう！」

そこには何故か、裕子がいた。

裕子は相変わらず不気味な笑みを浮かべて、彩音を見つめていた。

「彩音！ こんな可愛いドレス着るなんて、ズルイ！」

「白石さん、先生からドレスを預かってますよ」

生徒たちはわざとらしくもじもじしながら言った。

実行委員長が「ドレス」を彩音に手渡した。

「確かに渡しましたよ！」

彩音はきょとんとしていた。

（へ・・・？ ドレス？ なんで・・・？）

何が何だかよくわからないと言いたげな彩音を見て、裕子は呆れたように苦笑した。

彩音は、以前裕子に言われたことをすっかり忘れていたのだ。主役になれば、白いドレスを着れる。

そもそも、そのドレス目当てで主役に入ったというのに。

彩音は差し出された白く光るドレスを見て、

ドッキリ大作戦でもされてはめられたのかと思いたくなるほどだった。

「うっそ・・・めちゃくちゃかわいいじゃん！」

彩音は思わず叫んでしまった。叫ばずにはいられなかった。

白い輝きを放つ、滑らかな生地ドレス。

まるでお姫様が着るような、とても高価そうなものだった。

「あゝあ、こりゃ山本もまたペース狂わされるな・・・」

裕子はニヤニヤ笑って言う。他の生徒たちも同感だった。

しばらく、文化祭が始まるまでの間控え室でドレスが人から人へと手渡された。

男子はそこまで興味を示さなかったが、女子ときたらもうきやあきやあ。

彩音と裕子はそのたびにクスクスを笑っているのだった。

そのとき、控え室の扉が開いた。

「もうすぐ開会式始まるから！ 準備しといて！」

生徒は言った。一同は元氣良く「はい」と返事をした。

役者たちはまるで緊張していないようだった。

もう慣れたのか、震えたり焦ったりしている生徒は誰もいない。

彩音はドレスをテーブルの上に置き、近くの椅子に座ることにした。

「彩音！ ウチさ、開会式行かなきゃなんないから、後は一人で頑張れよ！」

「あ、うん。わかった！」

裕子は扉を押し開け飛び出した。

そしてすれ違いさまに知恵が控え室に入ってきた。

知恵は彩音のそばに近づくと報告する。

「川村君、まだ来てないみたいよ」

いつもと同じく、辛辣そうな物言い。

彩音は振り向きもしなかった。

（やっぱり・・・無理だよね・・・）

「仕方ないよ。用事、あるんだし」

今思い出しても涙が溢れる。彩音は暗い声で答えた。

知恵は顔を歪ませた。何かあったのかと感じ、聞いてみることにした。

「昨日、川村君と何かあったの？」

（我慢しなきゃ・・・）

「別に何もー！ほんとに用事みたいだったから、仕方ないんだって！」

本当に芝居が下手だった。知恵はさらに顔を歪ませる。

しかし、もうそれ以上何も聞くことは無かった。

仕方ないよね・・・。お母さんの命日なんだもん・・・。
そんな日に、みんなで楽しめるわけないよね・・・。

—— 10時になった。

文化祭の劇もそろそろ中盤を迎えたころだろうか。

涼は、お墓参りに行くため家に滞在することになっていた。

（ほんとに・・・これでよかったのか・・・？）

昨日から彩音の言葉が頭から離れなかった。

雄一と似ている。雄一も、彩音みたいに真に俺のことを気遣ってくれていたからだ。

（よかったに決まってるよな・・・）

仕方ない。もうみんなも、どうせ俺は休むって思っているだろう。

彩音は・・・。あいつもきつとそうだ。

もう俺のことなんか諦めて、劇に専念できてるはずだ。

彩音は友達じゃないんだ。親友でもないんだ。それはあいつの一方的な思い込みだよ。

はつきり言って、迷惑なんだよ。

（そういえば、なんであいつ、昨日あそこにいたんだろ・・・）

今更ながらに思う。そういえば、全く考えても見なかったな・・・。

「もしかして・・・俺に、明日来いつて・・・」

いや、でも、それは来たときの話だ。帰るときは諦めていただろう。

（はは・・・そうだな・・・）

彩音は雄一じゃない。涼は何度も心の中で叫んだ。

彩音と雄一を一緒にすれば、雄一に失礼じゃないか。

もうどうだっていいんだ。考えたくも無い。放っておいてほしい・・・。

「涼、そろそろ用意しなさい。行くわよ!」

由紀姉さんの声がする。涼は立ち上がった。

「うん、もう用意はできてるよ」

「そう、じゃすぐに出発しましょ」

涼は階段を下りた。服は学校の学ランを着て、下は制服。

葬式だというのに、これが今一番礼儀正しい服装だなんて、なんか嫌だなあ。

階段下には、喪服を着た由紀姉さんが靴をはいているところだった。

「文化祭、行かなくてよかったの？」

由紀姉さんは涼の顔をうかがって言った。

由紀姉さんは今日文化祭があることを知っていた。なぜだろう・・・？

「別にいいよ。みんな、俺のことなんか相手にしてないし」

涼は由紀姉さんの背中を見つめて言った。

「でもね、昨日の女の子、あなたが来ないことに腹を立てていたみたいよ」

（やめろよ・・・いちいちうるせえんだよ）

「あいつは・・・別にいいんだ。友達とも思っていないし」

涼は怒りを抑えていた。

なんで由紀姉さんは俺が墓参りに行くことを躊躇わせるんだ？

ほんとやめてほしい。俺は別に行く気なんかねえんだよ。

行っても絶対楽しくないし、別に行かなくても迷惑にもならない。

——あなたが来ないことに腹を立てていたみたいよ。

由紀姉さんの言葉が、何故か胸の中でこだましている。

違う・・・あいつの一方的な勘違いだ。

友達なんかじゃない。親友なんかじゃない。

数々の思いが胸を駆け巡る。涼は必死にそれを否定した。

玄関扉が開いた。そうだ、車に乗ればもう後戻りは出来ない。

これでこの嫌な呪縛から開放される。

もういい・・・もういいんだよ！

「本当にいいの？　それで」

由紀姉さんは車に片足を突っ込む涼に呼びかける。

涼は立ち止まった。

「うるさいんだよ！　いい加減にしてくれ！」

涼はついに叫んだ。怒りの声がこだまする。

由紀姉さんは少し驚いた様子だったが、笑ってごまかし、車に乗った。

——本当にいいの？　それで

やめてくれ……。なんで、みんなそうやって俺を苦しめるんだよ。

俺の気持ちがわからないのか？

乗ろう。車に。そうすれば由紀姉さんは出発してくれる。

「・・・」

―あれ？

「っ・・・」

―おいおい。

「・・・！」

―なんで乗れねえんだよ。

「っ・・・！」

―なんで動かねえんだよ。

「や・・・め・・・」

―俺は彩音を友達とも親友とも思っていないだ。

「ろ・・・」

―それはあいつの一方的な思い込みなんだよ。

雄一じゃない。確かに、雄一と彩音は似てる。

一緒にいれば、楽しいし安心できる。

でも、彩音は雄一とは違うんだよ。

雄一と抱き合ったときと、彩音が胸に飛び込んできたときとは、全然一致しなかった。

そう、決定的に違うんだ。俺は、どうしても雄一と彩音を重ねることが出来ない。

だって彩音は・・・あいつは・・・

——俺の恋人だから。

CHAPTER 16：桜平岡文化祭（後書き）

忘れられない過去があります。

でも、過去を断ち切らなければ前には進めません。

しかし、忘れることと、断ち切ることは違います。

涼は今、過去を断ち切りました。

前に進むこと。彼の止まっていた時間が、やっと動き出したのです。

CHAPTER 17：頑張れとありがとう

——いよいよ文化祭也大詰め。

控え室。とうとう最高にして最難関のラストシーンが始まるうとじていた。

彩音はドレスに着替えて、生徒たちの前へ現れた。

「あの……これでいいかな？」

少し照れながら彩音は聞いた。生徒たちは振り向き、啞然とする。

「……彩音……あんた、女優！？」

「可愛すぎる……可愛すぎ彩音ちゃーん！」

「うわぁ……俺一生でいいからこんな子と付き合ってみてえ！」

まさかここまで似合うとは思っていなかったのだろつ。

彩音はもつどこかのお姫様のような、上品で優しい雰囲気醸し出していた。

可愛いだなんて言うまでもない。とても中学生とは思えなかった。

「早く行きなさい。幕は閉まったわよ」

優しい微笑みを浮かべながらも、知恵はその辛辣な口調をかたくなに続けた。

「……うん」

彩音は小さく返事をする。

「何緊張してんのよ！ 大丈夫、彩音ならきつとうまくいくよ！」

「頑張れよー！ 彩音ちゃん！ 最後まで応援してるからなー！」

「山本気絶したらどうしょー！ アッハッハ！」

声援。応援。クラスの仲間が、背中を押してくれているのに、

彩音にはいつものような自信と元気が感じられなかった。

彩音は階段を上り、舞台に入ってしまった。

幕は閉まっており、舞台は真っ暗だった。

知恵は裕子に近づき、淡々とした口調で言う。

「ねえ、どう思う？」

どう思う？ 何が、とは言わずとも、何を指しているのが安易に理解できた。

「このままいくと絶対に失敗するだろうね。あいつさ、いつもと様子が違うよ。」

なんつーか、彩音のオーラじゃないな」

裕子は答えた。知恵も、同じようなことを考えていたのか、小さく縦に首を振った。

「きつと川村君のことでしょうね。何かあったみたいよ」

そのときだった。何かが、裕子たちの隣を横切ったような気がした。急だったため、必要以上に驚いた裕子だったが、横切った者の正体を見て安心することができた。

「はぁ……お前遅いん……っておい！」

涼は舞台の階段を上った。そこに彩音がいるのだと、直感したらしい。

初めて自分の気持ちに気付くことができた。

友達じゃない。あいつが友達だということに、何故こんなに否定的になったのか、

今ようやく理解することが出来たんだ。

俺は、白石が好きなんだ。

恋人は、友達じゃない。親友でもない。もっともって、特別な存在なんだ。

時には自分を切なくさせる存在で、でもそれ以上に自分を強くしてくれる存在。

でもな、お前はそれよりもっと大切な存在なんだ。

俺は、お前が共に前を向いて歩いてくれる存在だと思う。だから、惚れたんだと思う。

お前は、現実から背を向け、目を背けていた俺に、前を向かせてくれた存在なんだよ。

「白石！」

山本と開幕を待つ、ドレス姿の彩音に叫んだ。
彩音はびっくりして振り向く。

「……川村君……来てくれたんだ……」

とても嬉しそうだった。

今はもう、お前の前で素直になれる。

ありがとう。その優しい笑顔のおかげで、俺は変わることが出来たんだ。

「頑張れよ！」

「うん！」

頑張れよ。俺が今、お前に出来ることは、精一杯の応援をすることだけだ。

涼は控え室に戻った。

しかし、そこには冷たい目をした生徒たちが待っていた。

「お前……今更何しにきたんだよ！？」

「帰ってよ！ 誰もあんたに来てなんて頼んでないよ！」

「どうせズルなんだろ！？ もう一生学校くんない！」

今まで非協力的だった涼に、少なからず怒りを覚えているのだ。涼はうつむいた。生徒たちと目をあわしたくなかったから。

「ああ……すぐに帰るよ……」

どんよりと重い口調でポツリと呟いた。

生徒たちはあまりに無抵抗な涼に、逆に驚かされたようだった。

「その必要は無いよ！」

流れをぶった切る、強気な声が響き渡った。

「そうね。ギリギリでも来たことには変わらないものね」

内気でヒステリーと噂の、辛辣そうな声がする。

裕子と知恵は、生徒と涼の対立の中に割って入った。

「あんたのおかげで、文化祭、成功しそうだよ！」

裕子は涼の肩に手を乗せて言った。知恵も逆の肩に手を乗せて言う。

「お手柄というか、当然というか。人を焦らすのが好きなのね」

裕子は肩をパンパンと叩いて、ご機嫌そうに笑った。

「まあ彩音が終わるまでいてあげな！ なっ！」

.....

CHAPTER 17：頑張れとありがとう（後書き）

出会ってまだ一ヶ月も経っていないけど、
涼の心は大きく変化しました。

CHAPTER 18：深まる関係

なんだろう……。

上手くいきそうな気がする……。

縛り付けていた何かから、解放された感じ……。

暗い舞台に、一筋の明かりが見えた。幕が開いたのだ。左右から照らすまばゆい光。観客席の前列さえも、見えない状態だった。

「僕は、ピユネ様を一生お守りすると、心に誓いました!」

山本が叫んだ。緊張もなく、堂々とした調子だ。

「私も、ヘイル様に一生ついていくと、心に誓いました!」

彩音も叫ぶ。声に感情がこもっていて、非常に上手い。

上手くいく。きっと上手くいく。なんでだろう。この自信は、どこから湧いてくるんだろう?

山本と彩音は向き合った。最後の最後のキスシーン。

大丈夫。成功する。今まで頑張ってきたんだ! 絶対に成功させるよ!

「ピユネ、ありがとう。僕は君を愛しているよ」

観客は息を呑んだ。緊張と興奮の瞬間。

「ヘイル、私もあなたのことを愛しています」

見ているほうも恥ずかしくなるような、最高の演技。

そして、ついにこのときが来た。

山本は目を閉じ、顔を近付けた。彩音も同様にする。

完璧のタイミング、照明がだんだんと暗くなり、幕も閉じかけている。

もう少し、もう少しだ。

観客席の男女はパニック状態だった。

きゃあきゃあわあわあ、うるさいほどに歓声を上げている。とにかくみんなは、興奮の絶頂に達していた。

そして明かりが消え、幕も閉じた。

それを確認した二人は、咄嗟に額を前に出す。ゴツンという音とともに、二人の顔は離れた。

「はあ……緊張した。ってか、お前可愛すぎ！」

山本は照れながら言う。彩音は優しく微笑んだ。

そして、一年生全生徒が控え室から集まってきた。

舞台裏、最後の挨拶。全生徒が手をつなぎ、大声で礼をする。

舞台は開かれた。観客席から歓声と拍手が巻き起こる。

一年生文化祭は無事に終わったのだ。

「「ありがとうございますー!!」「」

みんなは一斉に礼をした。さらなる大拍手が体育館に響き渡った。

その間、涼は控え室で待機していた。

やがて礼を終えた生徒たちが戻ってきて、びっくりしたように叫んだ。

「てめえ！ 何そんなところでサボってんだよ！」

生徒たちの足がその場で止まった。涼は無愛想に顔を向ける。

「いい加減にしろ！」

一人の生徒が涼の胸倉をつかんだ。涼は何も返事をしない。

「くっ！」

顔色一つ変えず、まるで何事もないかのような目をする涼に、生徒は齒をギシギシさせた。

このままだと生徒は涼を殴ってしまうだろう。

そうなれば、せっかく成功させた劇も台無しになる。

横から見つめる生徒たちも、どうしようかとおどおどしていた。

「ごめん」

涼はたった一言だけ呟いた。ごめん。生徒たちからすれば、初めて聞いた言葉だった。

だけれど、とんでもなく無愛想で、まったく謝っているようには思

えない。

そしてそれは、逆にこの生徒を腹立たせた。

「そんなんで許してもらえるなんて考えてるお前がムカツクんだよ！」

生徒は拳を引いた。まずい、このままじゃ涼が……。

生徒たちは息を呑んだ。止めたくても止められない。そんな自分たちが、情けなく思えたほどだった。

「やめて！」

焦った様子もなく、むしろ優しさに包まれた声がすぐ近くで聞こえた。

「川村君は仕方ないの。用事があつたんだよ」

彩音だ。ドレス姿の彩音は、一段と可愛かった。

「……くそ」

生徒は残念そうに、でも安心したように呟いた。そして、乱暴に扉を開けると控え室を去っていつてしまった。

「川村君、来てくれてありがとう」

彩音は小声で言った。とても優しい笑顔だった。

嬉しそうで、落ち着いていて、柔らかい雰囲気にも包まれた顔。

「ああ……」

涼は耐え切れず、彩音から目をそらした。
顔が熱くなるのを感じる。

彩音はその後、更衣室に入って制服に着替えた。
ドレスは先生に返却することになり、その役は実行委員長にまかされることになった。

「ねえ、川村君、どうか行こう！」

更衣室から出てきた彩音はさっそく言った。

「あ、おい」

返事も待たず、彩音は涼の手を引いた。体育館を抜け、新館の階段を登る。

体育館も新館も旧館も、中から外まで無数の飾り付けがされていた。
また、劇が終わっていったん昼食をとる生徒たちも見掛けられた。

彩音と涼は、階段途中の非常階段のところで立ち止まった。

「どこいっつか」

もう既に、各クラブによる催しが始まっている。
廊下にも階段にも飾りつけがされ、教室からは生徒たちの暴れる声

が聞こえる。

（気づかってくれてるのか……？ ……やっぱり、その程度しか見られてないのかな……）

気をつかってくれるのは嬉しい。でも、どちらかといえば、せめて友達感覚で接してほしかった。

気を遣って接しているなんて、まるで俺が彩音の自由を邪魔しているみたいじゃないか。

「な、なあ白石」

涼は白石を呼び止めた。

「そのさ……気遣ってくれるのは嬉しいんだけど」

「え？」

白石は振り向く。涼は、遠慮がちにこう言った。

「ほんと、他の友達と行きたかったって思ってるんなら、そっち優先してくれよ」

彩音に迷惑をかけたくない。別に一人なら慣れてるし、気遣いで俺と文化祭巡りをしているのなら、他に行ってくれたほうが気が楽だ。

彩音は涼に一步近づいた。

「じゃお言葉に甘えて、友達優先することにするよ」

優しい笑顔がとても可愛い。でも、言われた言葉は少なからずショックだった。

（やっぱりそうだな……。じゃやることないし、帰ろうつと……）

涼は振り向いた。まあ自分で望んだことだから文句も言えない。

「じゃあな」

ポツリと呟く。なんか、ため息をつきたい気分。

涼は来た廊下を戻ろうかと歩き出したが、何者かに腕をつかまれて立ち止まった。

「ん？」

振り向くと、そこには自分の腕をしっかりとつかむ彩音の姿があった。

涼は驚いたように目を見開く。

彩音は、クスクスと笑いながら復唱した。

「お言葉に甘えて、友達優先することにするよ」

顔がすぐ近くにあり、涼はとても恥ずかしくなった。くりくりした目がとても可愛い。

「あたしはね、川村君と文化祭回りたから誘ったの。気遣ったりなんかしてないよ」

「……」

嬉しかった。言葉に出来ないほど嬉しかった。

ただ女に誘われただけで、こんなに嬉しいなんて、なんか変だな。

涼と彩音の会話を盗み聞く、あの二人の姿がここにあった。

「あいつらいつの間にイイカンジになったんだよ?」

教室の扉の影、気付かれないようにそうつと見る裕子の姿。

「ああ、あの二人は以前からあんな感じよ」

重なるようにしてそうつと見る知恵の姿。

「二日前に彩音に聞いてみたの。川村君のことどう思ってるかってね」

「ふーん、それで、彩音はなんていつてたのよ?」

「あ、まずい」

二人が歩き出すのを見て、二人はぱつと教室に引き下がった。とりあえず悪気がなくとも盗み聞きをしているのはバレてはいけないと思う。

裕子は机にドカッと座り、腕組みをした。

「んで、彩音はなんて？」

「へわからないけど、友達とはちょっと違う感覚かもって言うってたわ」

「おいおいそれってよ、好意をよせてるってことじゃ……？」

「私の結論から言うと、へ友達以上恋人未満だと思う」

「……ったく、そのまんまじゃねえか」

裕子は筆箱からペンを取り出し、クルクルと回し始めた。

「あゝあ、彩音と川村が付き合ったらクラス中パニックだろうな」

とにかく器用なまわし方。知恵はそれを見つめながら答える。

「少なくとも、山本君は意気消沈でしょうね」

全く興味のなさそうな物言い。そのとき、裕子のペンが床に落ちた。

「ぶっ！　それ言ってる！」

CHAPTER 18：深まる関係（後書き）

あと数話で完結の予定です！

途中、なんか小説とはかけ離れたような文章になってしまいました
が、最後まで暖かく見守ってやってください！

CHAPTER 19：涼の告白

手を繋いでいる間が嬉しくて恥ずかしい。

涼は彩音に言われるままについていき、

まずはテニス部主催の「お化け屋敷」に入ることにした。

「これ……マジにやってるな……」

涼は飾りつけを見上げて呟いた。彩音も共感する。

お化け屋敷は窓も教室の中も全面真っ黒で、

扉の窓は特別に張り替えてもらったのか割れていた。

入り口あたりにくると、中から奇妙な叫び声が聞こえ、震える笑い声が聞こえる。

「俺は別にいいけど、お前大丈夫なの？」

涼は彩音に問うた。そもそも、涼にとって一番怖いものは人の死だから、

こんな子供だましは怖くない。それに比べて彩音は入る前からぶるぶると震え、

いかにも怖いと言いたげな格好をしていた。

「うん、平気」

無理につくって言う。でも、と躊躇った涼だったが、彩音はそれを促した。

「いっっ！」

（大丈夫なのか……こいつ）

そう思いながらも涼は彩音の後についていった。

しかし、いつの間にか涼が先頭で彩音が後からついてくるようになっていた。

やっぱり怖いのか、と思いながら涼はひたすら前へと進んだ。

そのとき、涼の足首になんだかヌルつとしたような細い糸のようなものが絡みついた。

しかしすぐに足首から離れ、どこかへ行ってしまった。

（へびの人形か？ まあ手作りにしてはうまいな……）

「きゃああー！」

「っ！」

へびよりむしろ、彩音の叫び声に驚かされてしまった。

「おい、どうした……？」

「なんか……なんか……巻きついてきて」

なーんだ、さっきのへびか。まったく、驚かすなよ。

涼は腰を抜かした彩音を引っ張り起こして言った。

「普通あんなの上から落ちてくるよ。肩くらい狙って落とされる」

そしてあははと笑う。しかし彩音はさらに驚いたようだった。

「上……上って……」

震えている。ていうか、へびとかお化けじゃないだろ？しかも人形だし。

今度は涼が手を引いて歩き出した。

（しかし生徒主催にしては上手く出来すぎてるよなー……）

途中であつた飛び交うコウモリとか、血を流した女の死体が突然倒れ掛かってくるとか、

まあなんともマジなお化け屋敷の仕掛けをしているみたいだ。

しかし、やはり教室を迷路にしただけ。お化け屋敷は数分で踏破することができた。

「大丈夫か？ 白石」

「いあ……怖かった……」

涼は全く平気な顔をしている。しかし、彩音はもうぐったりしていた。

あまりに怖すぎて疲れてしまったらしい。

「怖いのが苦手なら、行かなきゃよかったのに……」

涼は言った。

「うん……後悔した」

だろうな。身震いつてのはあんまり気持ちのいいものではない。

二人は少し休憩することにし、学校の非常階段四階（行き止まり）の壁にもたれて座った。

そのときにはもう彩音も落ち着いていて、ため息をついていた。

「はあ……怖かった。ちょっとリアルすぎだよね」

「ああ。かなり上手くできてたよなあ……」

そこで苦笑。

しばらく沈黙が流れた。涼は空を見上げ、彩音は黙って下を向いている。

やがて彩音は涼を見つめ、思い出したように問い掛けた。

「そっいえばさ」

「ん？」

「お墓参り、行かなくてよかったの？」

突然の質問に、涼ははっとした。そっいえば、そんなのあったっけ……。

行かなくてよかったもなにも、もう行っても遅いしね。

「まあね。最初は行くつもりで準備までしてたんだけど、なんか…」

そこで一瞬言葉を詰まらせた。彩音は黙って聞いている。

「お前が昨日さ、必死で俺のこと探してたって聞いてさ、文化祭行かなきゃダメなんだって思ったんだよ」

これはウソ。もっと大切なことに気付いたから、文化祭に来たんだ。

「ふん」

彩音は優しい微笑みを浮かべる。
どことなく嬉しそうにも見えた。

「あたしはね」

「ん？」

涼は彩音を向いた。彩音はただじっと前を見ている。

「あたしはね、単純に川村君に来てほしかったんだ」

それはわかってる。きっと、氣遣ってくれたんだろ？

「あたしさ、最後のシーンね、多分失敗すると思ってたんだ」

涼はいきなり何を言い出すんだろうと思った。

「はっ？ どういうこと？」

ちよつと理解しがたい。あれほど上手く成功してたのに。

「調子悪かったんだ。演技も、練習のときより上手くいかなくて、このままじゃ最後はマズイと思ってたんだけど……」

そりゃ、本番は緊張するし、練習のときより調子悪いのは誰だってそうだろう？

「でもね……川村君に頑張れって言われて、すっごくやる気が出た」
「……？」

「なんかとたんに上手くいきそうって思うようになってさ……すごく不思議だった……」

そうか、だってお前、団結力の影響強いもんな……。

俺が欠けていたせいで、心配させちゃって悪かったよ。

「ごめん」

涼は呟いた。

最終的には成功したけど、やっぱりちよつとした不満も持ってるんじゃないかな……

しかし、彩音はそんなことを言いたいではなかった。

そして、謝ってほしいわけでもなかった。

ただ、涼が無理をおして来てくれたことに対する感謝。

今涼に伝えたいのは、感謝の言葉。

「ううん、違うの」

「……え？」

「あたしね、川村君に感謝してる」

そしてまた、嬉しそうな微笑み。

「本当はお母さんのお墓参りの日を潰したことに罪悪感とか、感じるべきなんだけど」

そうか、そうなんだよな。

「それ以上にすっごく嬉しかった」

この、胸が熱くなるような感覚のおかげで、今日俺は学校に来ることができたんだよ。

「だから、ありがとう」

暖かさって凄いやな……。

「なあ、白石」

今しか伝えられないような気がする。

「あの……その……」

自分の今感じている想いを。

「え？」

「えっと……俺さ」

俺はさ、きつとお前以上に感謝してるよ。

「その……なんつーか」

もしさ、お前と出会わなかったら、俺ずっとあのままだったと思う。

「俺……お前の……こと」

言える。言いたい。

しかし、言葉がのどで詰まる。言えない。恥ずかしすぎて、言葉が出ない。

涼は頬が急に熱くなるのを感じた。

そして、自分の顔が無意識に赤くなっていることに気付いた。

彩音は黙って聞いている。もうとっくに気付いているだろうけど、

あえて待つてくれているのだ。そこまで気遣つてくれているのに…
…言えないなんて。

「……っ」

やはり口に出せない。たった二文字の言葉を伝えるだけなのに、

こんなに勇気があるなんて思いもしなかった。

「……はあ」

思わずため息をついた。やっぱり、無理っばい。

「悪い……忘れてくれ」

こんな言葉なら容易く言える。でも、一番言いたいことが一番言えない。

涼は彩音を置いて立ち去った。

そんな涼を、彩音はあえて追いかけようとはしなかった。

（わかってたけど……やっぱりそれは、ちゃんと伝えてほしい）

彩音は微笑みを浮かべていた。少し頬が赤くなる。

CHAPTER 19：涼の告白（後書き）

最近の歌にもこんなのありますよね。

「花の名」だったっけかな。

簡単なことなのに言えない。でも言えなくなっただけちゃんと伝わってる。

まさにその通りだと思います！

でも、やっぱり言われたほうが嬉しい……？のかな（笑

CHAPTER 20：知恵への頼み

——翌日、涼は普通に学校に来た。

文化祭は三日続き。よって本日は二年生劇から開会する。

（あー、めんどくせえな……）

そう思いながら体育館に入る。

正直、文化祭自体はやはり全く楽しくない。

他の生徒たちはきつと授業がなくて幸せだろうけど。

涼は体育館に入ってまず、舞台の前を歩く彩音の姿が目に入った。

でも、向こうはこちらに気付いていないらしい。

（まあこの距離だもんな。仕方ねえか）

ていつか会えばまた緊張してしまうかもしれない。

あー、やっぱりあのときちゃんと告白しとくべきだったか。

そう思いながらぼーっと突っ立っていると、

何か後ろから強烈なものに押されたような気がした。

「っ！」

「久しぶり」

（あっ……笠原……？）

再度確認しておこう。笠原とは、知恵のことだ。

「な、なんだよ。いきなり……」

そういえばこいつは入学してからまあまあ喋ってるヤツだよなあ……。

彩音よりは消極的だけど。

「いえ、ただ昨日のデートは楽しかったか聞きただけ」

（……はっ？）

「え、ちょ、なんで俺とあや……」

「あや……？ よく聞こえなかったわ。もう一度言ってくれないかしら」

危ない。思わず彩音と言ってしまふところだった。

「白石といたってこと知ってたんだよ？」

「私の情報網をナメないでほしいわね」

ただ一緒にいたところを見掛けただけだったが。

涼はため息をついた。はあ……そういえば、こいつどうでもいい」と調べるのスキだったつけ。

「いや、まあ途中で別れたよ。ってか、デートじゃない」

涼は訂正した。知恵はじろじろと涼を見ている。

（つたく、なんだよこいつ……）

「ふーん、結構イイカンジだったんじゃない？」

「べ、別に」

（まさかアレ見られたか……？　だとしたら最悪だな）

「てかよ、そんなことのためにいちいち喋りかけてこないでくれよ」

結論。うつとうしい。

そんなことで俺をわざとらしく問い詰めて楽しいか？

「彩音だったらバリバリOKするのにな」

真面目キャラが「バリバリ」とか言うとなんだか強調しているように思える。

「黙ってくれ。つか、話しかけてくるな」

涼はそういうと、クルッと振り返って立ち去ろうとした。

（あいつはいつつもあんな情報ばっかだよな……もっと役に立つ……）

…？つて、あれ）

涼は立ち止まった。

（そういえば、あいつ、クラスのヤツの誕生日くらい余裕でチエツクしてるよな！）

そしてまた振り向く。そして知恵に近づき、今度はこっちから話しかけた。

「あのさ、笠原。お前、クラスメイトの誕生日知ってるよな？」

「黙ってくれ。つか、話しかけてくるな」

即座に言い返された。しかも、さっき涼が言った言葉で。

（こいつ……やりにくい……）

知恵はさらに付け加えた。

「てかよ、そんなことのためにいちいち喋りかけてこないでくれよ」

（しかもなんでそんなくだらない言葉ばかり覚えてるんだよ）

「真面目に頼むよ」

「ふふ、わかった。で、なに？」

知恵はいつもの辛辣な知恵に戻った。調子の変化が激すぎる。だが、涼は少し安心したようだった。

「白石の誕生日教えてくれないか？」

「えー誰のって？」

（はっ？ なんだこいつ……）

「だから白石の！」

てかこいつ、こんな性格してたっけ。

俺が知ってる限り、こいつは真面目で無頓着で辛辣で冷静なはずな
んだけど。

「まあいいけどね。ただし……条件があるわ」

知恵のテンションの変化にはとうていついていけそうにない。
からかっていると思ったら真面目に戻るし、なんか疲れるな……。

「へ俺の大好きな彩音の誕生日を教えてくださいって言えば教えてあげる」

「はっ！？」

「当然よ。ただで個人情報教えるわけにはいかないわ」

知恵はにやにやと笑っていた。

涼はムっとする。

「ってか無理に決まってるだろ？ そんなの冗談でも言えない」

「じゃあ教えない」

「む……」

言いたくないけど、誕生日は知りたい。

こいつに聞かなきゃ、他の生徒には頼みにくいし、ましてや彩音に聞くなんて不可能だ。

「ちょ、ちよつと来い」

「はいはい」

涼は人が多い体育館から離れ、グラウンドの端に向かった。もし言うとしても、体育館とかで言って他の生徒に聞かれていたら、本気で勘違いされるかもしれない。

それにしても、知恵の様子がおかしい。知恵はもつとおとなしくて、人間不信だったはず。涼と喋っていたころだって、涼と同じくらいに単発な発言しかなかったし、こんな意地悪な女のようなことは決してしなかった。

やがて二人はグラウンドの隅、高いフェンスのそばにきた。

「さき言っとくけど、俺別にあいつのこと好きじゃないから」

そういつても、知恵はニヤニヤと笑っている。ほんとにやりにくい。

「なんでもいいけど、早く言いなさいよ」

涼はうつむいた。他人に言うにしてもさすがにこれは言いにくい。

「俺の……だいです——」

「なんて言ってるの？ 全然聞こえないわ」

知恵はわざとらしく耳を近づけ、あたかも聞こえないようなフリをした。

「俺の大好きなあや——」

ここで声が詰まる。やはり言えない。いくら知恵が相手でも、そんなこと言えないよ。

というよりも、こんな冗談じみたことでスキだなんて言いたくない。

（知恵……わかってくれよ）

「なーにそんなに必死になってるの？」

気軽に聞いてくる知恵。涼は、もういいといわんばかりにその場に座り込んだ。

「やめてくれよ……」

ボソッと呟く。

「もういいだろ？ お前だってもうわかってんだろ？」

「ええ。もちろん」

知恵は相変わらずニヤニヤと笑っていた。

「はぁ……わかったわ。からかってごめんなさい」

苦笑しながら言う。

涼は顔を上げた。

「彩音の誕生日は今週、明後日の土曜よ」

淡々とした言葉。涼は思わず声をあげた。

「……はぁ！？ 明後日って、早すぎるだろ？」

「人間いつ生まれたって勝手でしょ？」

今週土曜……そんなすぐなのか……。

「わかった。笠原、ありがとな」

涼は苦笑いを浮かべて言った。

やっぱり、なんだかんだ言っただけで知恵の性格はいつもと変わらない。

「どういたしまして」

CHAPTER 20：知恵への頼み（後書き）

次回、涼は誕生日プレゼントを買いにいきます。

ってか、途中で気付いたんだけど文体がおかしくなってきたかも……

CHAPTER 21：ショッピング巡り

——土曜日、涼はさっそく彩音へのプレゼントを買いに向かった。

ここはショッピングセンター。アクセサリーショップだ。

（うーん、どんなのが好みなんだろう……）

涼にとって、女性へのプレゼントなんて初めてだったため、女性の好みやさっぱりわからなかった。目の前には、ペアネックレスや指輪、ピアスや髪留めのゴム（かなりオシャレ）など、多種多様なアクセサリーが置かれている。しかし、どれを選んでいいかわからない。

「やっぱりアクセサリーより、服とかのほうがいいのかな……」

ポツリと呟いた涼は、次に服屋に向かうことにした。

「待てよ……」

しかし、アクセサリーショップのすぐ手前で立ち止まる。

「俺が女性服なんて買ったら白い目で見られそうだな……」

店員にじろじろ見られる情景が安易に想像できる。涼はぞっとした。

そして、またアクセサリーとにらみ合いをするのだった。

ペアネックレス。まだ付き合ってもいないのにこれは引かれるだろうな。やめよう。

普通のネックレス。そういえば、彩音がネックレスなんてつけているところ見たこと無いなあ。というかそもそも、彼女の私服姿すら見たこと無いかもしれない。なんだか強制っぽいことになるかもしれないし、やめよう。

ピアス。これは確実に有り得ないだろうな。そもそも彩音が、そんなチャラチャラしたような飾りつけをするはずがない。やめよう。

髪留めのゴム。普通のだったら別に要らないし、でも少し凝ってしまつとかなり派手なモノになってしまう。また、鉄製の髪留めでもよかったのだが、そもそも彩音がそんなものをつけてきたところを見たことが無い。やめよう。

では、アクセサリーはパスか？まあそれ以外にもいろいろあるしな。よし、他のとこいつてみよう！。

涼はそのままアクセサリーショップを離れ、ハザ・モールへ向かった。そこは、基本的にぬいぐるみやコップなどがメインにあり、プレゼントとしてはけっこう一般的な場所だろうと思われる。

涼の目にまず飛び込んできたのは、鳥の可愛いぬいぐるみだった。

（これなんかいいんじゃないか……）

涼はぬいぐるみを手にとり、側面や背中を見たり、色々と回転させて隅々まで眺めた。

（やっぱりだめだな）

涼はぬいぐるみを置いた。なんだかしっくりこない。

そして涼は自分に言い聞かせた。

（時間はあるんだし、ゆっくり悩もう）

恋人に渡すプレゼントなんだから、最高のプレゼントにしてくちゃだめだしな。

涼はそこを一通り回り、違う出口からザ・モールを出た。そしてそのとき、ぱっと左を見ると、そこには可愛いピンク色の手袋があった。

「あ……」

思わず声が出た。これは似合うかもしれないし、これからの冬も便利だし、それに可愛い。

そして、何より自分の気持ちがつっぱりはまった感じがした。

「これにしよう……」

迷わず手袋を手にした。さっそくレジへ向かう。

「あのすみません、コレください」

「いらっしゃいます。……合計1200円になります」

涼は女の店員に、2000円を手渡した。800円が戻ってくる。

涼はすぐに店を出た。こんな可愛いピンクの手袋買っているところを見られるのが何故か嫌だった。

ザ・モールから離れ、店内のベンチに座り、購入した手袋を見た。

そして、安心したようにこう呟く。

「きつと喜ぶよな」

—— 違う

「えっ？」

涼は顔を上げた。しかし、周りには誰も居ない。

（なんだろ……確かに声が聞こえたんだけどな……）

まあいいか、と呟き、涼は手袋をバッグに入れた。

CHAPTER 21：ショップ巡り（後書き）

本当はもう少し詳しくしようと思ったんですが、あえて控えました！たとえば、どんなペアネックレスなのか、など。。。まあ、個人的にはこれでいいかなと。

CHAPTER 22：緊張の対面

夜になった。

空には月が昇り、星たちが煌々と輝いている。

家の中、電話の受話器を持ち、電話番号を押している一人の少年がいた。

「えっと……白石の電話番号はつと……」

電話帳を見ながら、彩音の家に繋がる番号を押した。ただそれだけのことなのにとっても緊張する。

涼は受話器を耳に当てた。プルルという音が鳴っている。それが三、四回続いた後、パチっという音と共に、女の人の声が聞こえてきた。

「はい、もしもし？」

どうやら彩音ではないらしい。

「あ、川村という者ですけど。彩音さんいませんか……？」

少し焦ったように涼はたずねる。

「あ、はいはい」

涼はしばらく受話器を耳に当て待っていた。だんだんと緊張が高まっていく。

そして、彩音の声があった瞬間、びっくりして叫んでしまった。

「は、はい！」

でももっとびっくりしたのは彩音のほうだったかもしれない。

「え、どうしたの！？」

なんだか心配そうに聞く。涼はなんとかそれをごまかした。

「あ、いや、ボーっとしててさ、急に話しかけられてびっくりしたよ」

そういうと、涼は一瞬受話器から耳を離して、ふうつと息をつく。

「えっと、急に呼び出してごめんな」

涼は落ち着いて謝った。

「うっん、ちょうど暇だったから。それで、何か用？」

涼はいつもと同じ調子に戻って呟いた。

「ああ、今からちょっと会えないかなって……」

結構すんなり言えた。やっぱり電話だと間接的で安心できるのか。

「あ、うん。いいよ」

優しい声。涼は満面の笑みを浮かべて言った。

「え、じゃ、学校前の公園に今から来て！」

「わかった」

「じゃ！」

涼は受話器を置いた。なんだか胸が躍っている。とても嬉しい。でも、それ以上に緊張し、心臓が鼓動していた。

涼は朝方購入した手袋を持って、さっそく出かける準備をした。

「涼、どこに行くの？」

由紀姉さんが扉から顔を出し、たずねた。しかし、涼はぶっきらばうな返事をし、殆ど相手にしないで玄関を飛び出した。

「急いでるなんて、珍しいわね」

涼は走って公園へと向かった。気温は寒い。ふっと白い息が吐き出される。

空には月と星たちが集会をしており、いつも以上に綺麗に見えた。

涼の手にはしっかりとピンクの手袋が握られていた。

（急がなきゃ）

手袋を見つめて言う。やっぱり、こういうときは男が先に行って待っているべきだろう。

ここから公園はけっこうの距離がある。だから、涼は走っていった。

やがて学校を横切り、公園の前へと出た。この時間の公園は、騒

ぐ子供たちの姿や群れて何かをする中学生たちがいないため、不気味なほどに静まり返っていた。

涼はふうつと白い息を吐き、公園のベンチに腰を下ろした。

「寒いな……まだ10月だったっけ……」

空を見上げてそう言う。震える身体をさすった。

涼は彩音が来るまで、片時も手袋を手放さなかった。せつかくの誕生日プレゼントなんだから、綺麗なままで渡したかった。

やがて公園の前に自転車が止まった。そのものはそこで自転車を降り、ベンチに座る涼に近づいた。

「遅くなつてごめんね」

全然遅くは無かった。むしろ、速いくらい。

彩音はひざにダメージの入ったジーンズを着て、上半身には白いシヨールを羽織っていた。

とても可愛い服装で、その姿を見た瞬間ドキッとさせられてしまった。

「あ、いや。俺も今来たところだよ」

涼は立ち上がった。そして、彩音と向き直る。

まじまじと見つめてくる彩音に、目を合わせられなかった。

「えっと……その……」

やはり直接会って言うのは勇気が要る。でも、まずはこの言葉から言わねば。

「誕生日……おめでとう」

遠くのほうを見遣りながら、さりげなく言った。
彩音はニコッと笑ってありがとうと言う。

「あの……それで、これ……」

涼は手に持っていた可愛らしい手袋を見せた。
そして、彩音の顔をチラッと見る。

「これ……お前への誕生日プレ——」

——違う。

「え？」

今度は確かに、誰かの声が聞こえた。

「……？」

「あ、いや、ごめんごめん。これ、誕生日プレゼントだ」

涼は両手で手袋を持ち、大事そうにそれを見つめる。しかし——

——違う

「う……？」

THE FINAL：心/PRESENT

涼の動きが一瞬止まった。でも、すぐ我にかえってこういう。

「じゃ……これ……」

涼は手袋を彩音に手渡そうとした。しかし――

――違う

また誰かの声。周りを見渡しても、誰かがいる気配もない。

（誰なんだよさっきから！）

――違う

ゆっくりゆっくり、プレゼントが彩音の手に近づいていく。

――違う

冷え込んだ風が吹き抜ける。髪がユラユラ揺れた。

この一瞬、涼はその消えそうな声と闘っていた。

（誰なんだよお前は……）

—— 違う

（何が違うんだよ！ 意味わかんねーって！）

—— 違う

（うるさいんだよ！ 同じことばっかり言いやがって）

—— 違う

（話しかけてくんない！）

耳に響く声。涼は震えながら手袋を前に差し出した。

しかし、声は止まない。

（なんなんだよ…… いったい）

—— 違う

（何が違うっていうんだ？）

—— 違う

（お前はどこから話しかけてきてるんだよ！）

—— 違う

（なあ……おい！）

—— 違うだろ

（……！）

その瞬間、涼の身体の震えが止まった。

「……っ！」

突然何が起こったか理解できなかった。

手袋は彩音の手には行き渡らず、空高く舞い上がっていた。

涼は手を振り上げていた。顔はうつむいている。暗くて、寂しくて、でも、強気だ。

「違う……俺がお前に渡したいものは……」

身体中が熱い。誰かを許せないときに髪の毛が逆立ち、感情が湧き上がってくるような、そんな感じ。齒はガチガチと震え、身体はシンと肌寒く、肩には力が入っていた。

何故だろう。何故こんなに、懐かしい感じがするんだ。胸がひんやりとした、この懐かしさ。

こんな経験、初めてのはずなのに、でも何故か、懐かしい……

そして、涼は気付かぬ間に彩音を抱きしめていた。

暖かくて、優しくて、懐かしい。

思いやりがあつて、いつも気を遣ってくれて、時には怒ってくれた、そんな彼女の心が、涼の胸に接触した。

「モノとか、そんなものじゃないんだ。俺がお前に渡したいものは……」

——好き。

その言葉なんだ。その、たった一言なんだ。

ありがとうのほうが相応しいかもしれない。

ありがとうのほうが今の自分に似合っているかもしれない。

でも違う。俺がお前に渡したいプレゼントは、

モノでもなく、ラブレターでもなく、告白のメールでもなく、ありがとうでもなく、

何よりも短い言葉で、何よりも身近な言葉で、何よりも大きい言葉。

好き。

涼は、彩音に突き放されと思った。

突然こんなことをして、平気な女なんていない。

でも、そうではなかった。

彩音は、抱きしめる涼を、抱き返してくれていた。

彩音の優しい心が、涼の心にできた穴を塞いでくれる。
閉ざされた心を、ゆっくりと開いていつてくれる。

痛みが引いていく。

心が温かい。

「あれ……泣いているの？」

彩音は涼を見て聞いた。言われるまで気付かなかったが、涼の頬には涙が零れ落ちていた。

「あ……ほんとだ……なんでだろうな」

涼はクスッと笑った。涙声だった。

ずっところえてきた、ずっと心に溜めていた、溢れるほどの涙が、
一気に零れ落ちていった。

そして不思議なことに、その涙は止まる様子なかった。

寂しくもなく、哀しくもなく、ただ嬉しいだけなのに、涙が止まらない。

まるで彩音の心の優しさが、涼の切ない思いを奪い去ってしまった
かのようにだった。

THE FINAL:心/PRESENT (後書き)

EPILOGUE：俺にとってお前は空

その後、俺の瞳は二度と発作を起こすことは無かった。

もしかしてあのときの涙は、俺の心にあつた苦しみだったのかもしれない。

どんなに薬を使っても治せなかったあの発作の治療法は、

人と心が通じ合うことだったんだ。

あるとき彩音が俺に抱き返してくれたのは、

俺の気持ちに伝えてくれたからだったのだろうか。

——それは、彩音本人しかわからないな。

……でも、わかることがたった一つある。

きっと、心のプレゼントはちゃんと贈ることができたって。

きっと、彩音に俺の思いが伝わったんだろうって。

たとえ彩音が、俺のことをどう思っていたのだとしても、

俺はあのとき嬉しかった。

抱き返してくれた、それだけで一生分の幸せを受け取ったような気がする。

——あれ？

あれ、それじゃ本当にプレゼントを貰ったのは俺のほうだったのか？

だったら、俺はあいつに何も贈れてない……？

そんなことないよな。

きつと、何かを感じ取ってくれたよな。

俺の最高のプレゼント。

彩音、お前に届いてくれていると嬉しいな。

「白石……ほら、空を見てみるよ」

「ん……？」

「俺は地面ばかり見てて、空の偉大さには全く気付かなかったよ。」

こんなに空は広いのに、俺は下ばかり見てた。

俺がこんなに変わることができたのは、お前のおかげだよ」

「ふふ……何ちよつとかつこいいこと言ってるのよ？」

「あはは……でも本音だよ」

「それはよかった！」

「うん……」

俺にとって、空はお前だ。

お前の存在こそが、俺にとっての空なんだよ。

はは……今度は真剣に涙がたまってきた。

泣いちゃう前にお別れだ。もう人前で泣くなんて、そんな恥ずかしいことはできない。

じゃあな！　またどこかで会おうぜ！

)
心 / P R E S E N T
T H E
E N D
)

EPILOGUE・俺にとってお前は空（後書き）

MESSAGE：マイメッセージ

ご愛読ありがとうございました。

最後あたりとても難しかったんですが、なんとか終わらせることが出来ました。

恋愛小説を作るのはまだまだ修行が必要みたいです。

とりあえず、ストーリー的にはこれでよかったと思っています。

文章的にはまだまだ全然だめですね。。もっと読みやすい小説になるように努力します！

そして私からのメッセージです。

私には好きな言葉があります。ある本でたまたま見つけた言葉なのですが、

この言葉はとても大事なことを訴えかけているように思えるのです。

価値とは、ありふれた、あたりまえのものがつくりだすのが、価値なのだ。

そのありふれた真実がないがしろにされて、何事につけ、価値というものがもっぱら例外にもとめられるとすれば、それは人の心根の貧しさを明かしこそすれ、人の気持ちを豊かにすることはない。

いつでも真つ先に見落とされるもののうちにあるのは、
どんなときも平凡な真実だ。

〜

何が言いたいのがよくわからないという方もいるかと思われ
ますが、あえて答えを言わないでおきます。

できれば自力でこの言葉の意味を汲み取ってくれればと思
います。では、最後まで読んでくださった方、本当にありが
とうございました。

またどこかの物語であなたと出会えることを心より願っ
ております

S
e
e

Y
o
u

A
g
a
i
n
!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2634d/>

心/PRESENT

2010年10月9日08時00分発行